

北九州芸術劇場 + 市民共同創作リーディング

平成30年度

Re: 北九州の記憶

戯曲集

はじめに

私たちが記録として知っている「街の歴史」には当然のことですが、私たちの身の回りの、ごくごく個人的なことについては記されていません。ですが、確かに当時を生きた人達はその場所に住んで、日々を暮らしていました。その時代に生きた家族のこと、仕事のこと、結婚のこと・・・様々なエピソードの「個人の歴史」が集まるとそれもひとつの「街の歴史」になるのではないのでしょうか。

「Re:北九州の記憶」では、北九州市に暮らす高齢者の方々に、地元の若手作家がインタビューを行い、1つのエピソードから発想を得た新しい物語を作りました。

この作品を通して、過去も未来も主役はこの街に暮らす私達である事に気付く事、そしてこの作品達が、この街の財産となる事を目指しています。

目次

ザイツミキ・ヒデオ伝説

春夢

少女歌劇団の話

妊婦とバスの話

来たれ！

リンタクの恋

おつかれさん

シリ会いたい

演劇研究会城野寮

無法者とピアニスト

作	作	作	作	作	作	作	作	作
渡辺明男	渡辺明男	寺田剛史	寺田剛史	大迫旭洋	大迫旭洋	鵜飼秋子	鵜飼秋子	穴迫信一
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
127	111	101	86	69	55	38	26	1

ザイツミキ・ヒデオ伝説

作 穴迫信一

【登場人物】

館林たてばやし 77歳

小本こもと 77歳

【1】

市民体育館。

卓球台が2列に8台ずつ計16台並んでいる。

2階では館林が双眼鏡で1階での様子を観察している。

小本、その横でラケットを磨いている。

小本 良さそうなおるかね

館林 いんや、素人ばかりや

小本 久々の体育館開催ちゆのに、これじゃあまた取られるど

館林 わしらも何回泣きみればいいんじゃあ

小本 館林くん、今日私はある賭けに出ようと思つとる

館林　　へタなことせんでくれよ

小本　　ワシのラケット、触ってみい

館林　　ん、ん、ん、

小本　　若干膨らんだのが分かるか

館林　　おお、確かにこの下半分

小本　　1回ゴム剥いで下に細く切った板を挟んだら

館林　　なんのために

小本　　ラケット上に出来た目に見えない程度の斜面がボールの軌道をずらす

館林　　確かに軌道が読めんければ打ち返せんな

小本　　かろうじて打ち返せても、カットをかける余裕もなからう

館林　　しかしルールにラケットへの加工は不可と

小本　　書いてあったな

館林　　小本くん、こりゃあフェアやない

小本　　全国大会にまで出おったババアとその練習相手のダンナが、70過ぎて趣

味で始めたわしらと、元々フェアなことがあるか

館林　　しかしこれはルールや

小本　　ジジババしか居らんに誰が気付くか、ええか、これも状況に合わせた作

戦よ、見つからなかったらルールもクソも無い

館林　　…まあ、そうやな

小本　　憎き財津夫妻、そろそろお出ましか

館林　　(もう1度双眼鏡を覗き) シードやから13時入り、もうすぐじゃ

小本 け切つてそこにメツシユを当てとる。ボールの勢いを少しでも殺すために。
館林 しかしルールには携帯扇風機を携帯し試合中に使用することは不可と…
書いてあつたな

小本 館林くん、試合中最もプレイが乱れる原因とされるのは何だ
館林 集中力の乱れ、つまり精神面からの影響や

小本 昨日財津家に不幸の手紙を出した。この手紙を明日までに7人に送らなければ不幸が降り掛かると。

館林 ワシは昨日直接家にお邪魔して、もち吉の五千円セットを渡して来とる
小本 揺さぶられること間違いなしやな

館林 しかしルールでは対戦相手の精神面への直接攻撃は禁止されて、いない！
小本 遂にあいつらの鼻を明かすときが来た

館林 伝説の財津夫妻

小本 いよいよお出ましか

館林 (もう一度双眼鏡を覗き) シードやから13時入り、もうすぐじゃ

【3】

館林が双眼鏡を覗くと、さっきの見知らぬ男女がウォーミングアップ
を始めている。速いラリー。

館林 小本くん、あいつら見たことあるか

小本 あの緑のジャージの連中か、知らん

館林 ゼッケンには、118、エンドウ、女もや

小本 なるほど休日に夫婦で体を動かして来たという感じか

館林 それにしては安定したラリーやな

小本 わしらの敵は財津夫婦のみ、今回こそ万年2位から抜け出そう

館林 小本・館林ペアは八幡東区では敵なしやった

小本 財津夫妻がこの地区の大会に参戦してくるまでは

館林 ミキザイツは言わずも知れた玉屋の元実業団選手、全国優勝経験も数知れ

ず

小本 ヒデオザイツは民生委員として、この辺りでは顔も広く人格者

館林 卓球の腕前だけでなく礼儀正しく品があり偉そぶらない、高齢者のお手本

や

小本 そのメンツごと叩き潰してやる

【4】

体育館1階、いよいよ財津夫妻が登場。

お揃いの黄色のジャージ。物腰柔らかく談笑しながら現われる。

館林 来た、ついに来た

小本 13時ジャスト、さすがやな

館林 おい、こつちみとるぞ

館林・小本、焦り2階から1階に向かつて

小本・館林 おはようございます〜！

以下、財津夫妻とのやりとりであるが財津夫妻の声は聴こえない

小本 (一息で) いやあ何と言いますか毎回ですけどお2人が来られるまで全然

落ちて着かないと言いますか緊張しちゃって、

館林 (一息で) 何か2人で色々話したりして財津さん今日も強いんだろうなあ
とか毎回なんかそういう決まりごとみたいになっちゃって

小本 今日もお手柔らかなに優しくお願いいたします

館林 どうかよろしくお願いいたします

小本 …、え？

館林 実行委員にクレーム？

小本 そりゃあ、お2人ともお強いですから

館林 …、競技のための卓球をやめる？

小本 …、長く続けて楽しむことを目的に？

館林 それはつまりラリーをどれだけ相手と続けられるか、ということでしょうか？

小本 相手が受けやすいように打ち返す、みたいな？

アナウンス「ゼッケン68、69ペアは6番の台にお越し下さい。対戦相手がお待ちです。」

館林 あら、呼ばれてますよ

小本 ではまた後ほど

館林 試合がんばってください

小本・館林、財津夫妻が試合に向かうのを見届けて

小本 なんか腑抜けた面やったな

館林 まあ2人もええ年やし

小本 試合、見とこうか

館林 っ、そうやな

【5】

6番の台で、財津夫妻を待ち構えるのは緑のジャージの遠藤夫妻

館林 おい、対戦相手はあいつらや、遠藤やったつけ

小本 初めてなら教えてやっとな方がいいやろうな、

(いきなり叫んで) おい、その緑のジャージ!

館林 小本くん!

小本 教えちゃろう、あんたらの目の前におるのは伝説の財津夫妻や、そしてう

ちらは八幡東区シニア卓球界の正統派ヒール小本・館林ペア

館林 私らの紹介はいらん!

小本 せいぜい気をつけることやな、ただのじじいとばあやない

館林 しかし2人は、もう戦う卓球はせんと

小本 それが納得いかんのよ

館林 よく見ると、あの緑のジャージの2人、かなり若いぞ、50代? いや40代か

小本 バカ言うな、ここはシニアの大会ぞ

館林 しかしルールには年齢による出場制限は、、

小本 書いていない!

館林 とんだ賞金稼ぎか、緑ジャージ

小本 こすいやつらや、油断しとつたらいかんぞ、財津夫妻、、

館林 おい、始まるぞ

試合の笛

小本 やっぱり我慢できん!

館林 小本くん?!

小本 おーい！私は腑抜けた財津夫妻なんて見たく、

強烈なスマッシュが鳴り響く

ボールが2階まで強烈な勢いで飛んで来て、館林の頬を切り、破裂。

一瞬、場が固まる。

時間があつて館林の頬から血が流れる。

試合終了の笛。

館林 痛(っ)っ

小本 強烈なドライブ…

館林 高速のリターンエース…

アナウンス 「ゼツケン121、122ペアは6番の台にお越し下さい」

館林 わしらか

小本 6番の台って、今試合が終わったあそこ

館林 次の相手は、、財津夫妻、、

小本 まさか、私らを油断させるため

館林 …小本くん、

小本 ふふ

館林 おい、こつちを見て笑いよるぞ

館林

ふふふ、これでこそ財津夫妻よ、腕が鳴るわ

伝説はつづく。

おわり。

春夢

作 穴迫信一

【登場人物】

瀬戸	江美子えみこ	佐和の母	80代
瀬戸	佐和さわ	永依、朝貴の母	60代
瀬戸	永依ながい	佐和の娘、朝貴の姉	30代
瀬戸	朝貴あさき	佐和の息子	20代

【0】

佐和

朝5時洗面台の前、血のように見える偽物の赤は、母の血
と言つても大袈裟なんかではないのである

それは母がまだ10代の頃に、唇に光らせた赤かもしれない
頬に馴染ませた赤かもしれない、爪に忍ばせた赤かもしれない

と思うと、母はまだあの頃のあの歌劇団の中にいて、紙吹雪の中、
傘を回しながら、足を高く上げ、そうやってステップ、靴を鳴らして、
この洗面台の、頼りない明かりを、舞台上の煌びやかな照明に、
鏡に写った自分を騙して、それに騙されるように、きつと昨夜もそうやっ

て、
どこかの世界で、気のある男に目配せをしながら、そう居たのかもしれない
い
部屋に戻ると母は居て、今でも、少女のような顔で寝ている。

【1】

瀬戸家。1軒家。

江美子の部屋。大きなベッドがあり、人が居れるスペースはほぼない。
目を閉じてベッドに寝ている江美子。
それを見つめる佐和。

江美子 お水とって
佐和 はい

江美子、幼児用のストローのついた瓶から水を飲む

江美子 静子さんなんか会いたがつとるやろうね
佐和 静子さんって、母さんと同じ年の
江美子 あんまりお酒飲ませんごとよ静子さんには
佐和 分かつとるよ

江美子

あの人が酔っぱらうとね、いきなり泣き出したりね、歌い出したりして、

佐和

楽団の愚痴言ったかと思えば、またステージに立ちたいって

江美子

よっぼど歌劇団が楽しかったんやね

佐和

お母さんもそうでしょ

江美子

私もそうやけど、静子さんはきつともっとそうよ

佐和

いいや江美子さんこそ歌劇団を謳歌してたはず

江美子

静子さんがそこまで言うならそうなのかもね

佐和

だって歌劇団の解散が決まったとき、1番泣いてたの江美子さんじゃない

江美子

それはだって、莉穂さんが泣くからよ

佐和

私ね、どうしようか考えてるの

江美子

どうしようかって？

佐和

再結成よ、OSKだってそうだったでしょう

江美子

いまさら無理よ、今の私たちにあんな華やかなステージ

佐和

もう皆に連絡とつてあるの、江美子さんもちよつと待ってて

江美子

わかった、待ってる

佐和

きつとまたすぐ手紙か電話かするからね

江美子

うん必ずよ

佐和

うん

江美子

来たらすぐ教えてよ

佐和

うん

玄関で音、永依の姿

リビング。江美子の部屋と隣合わせだが障子を閉めると別の空間のようになる。

永依は、実家の近くで夫と息子と娘と暮らしている。息子は来年中学生で、娘は5歳。

朝、娘を保育園まで連れて行った帰りに、たまに実家に寄る。
佐和、音に気付いて江美子の部屋を離れ、リビングへ。

永依　　なんか食べるもんある？

佐和　　冷蔵庫になかったら、ナッツあるよ

永依　　アーモンド？ピーナッツ？

佐和　　あれ、落花生

永依　　おばあちゃんは

佐和　　起きとるよ、ナッツ食べん？

永依　　歌劇団の話？

佐和　　最近は昔の団員から連絡来てないかってそればかり

永依　　連絡来よん？

佐和　　自分で話しておいで

永依　　住所も電話番号とかも変わっちゃうやろ、どうやって連絡くるん

佐和　　来よらんよ、60年以上も前よ

永依

お母さんがかけよると

佐和

2回だけね、もうやめようと思つとる

永依

なんでおばあちゃんはそんなこと覚えとんやろう

佐和

歌劇団が解散になった後ね、もう1回有志で集まって自分達で立ち上げようって話があったらしいんよ、でもその話もまとまらんまももう30年くらい

永依

それちようだい

佐和

お母さんにあげんごとね、ナッツは

永依

落花生のことナッツって言わんでよ

永依はそれを捨て台詞のようにして、江美子の部屋へ

【3】

永依

病床に伏せ、ベッドに寝たきりになってから、祖母は

思い出したかのように若き日の話を始める、

それまで聞いたことも無かった歌劇団のことを毎日、

嘘にしては細かく、膨大で、つつかからず、淡々としていて

嘘みたいなエピソードを繰り返している。らしい。

それで思うのは、起き上がれない体は夢を見せる、ということだ。私みた

いに、仕事と家事を繰り返しているより、ずっと。

祖母は日に日に、弱く、小さく、そして美しくなつてゆく。ベッドの
中で。

【4】

江美子の部屋

永依

おばあちゃん

江美子

連絡来たかね

永依

おばあちゃん、永依よ

江美子

あら本当、誰かと思ったら

永依

おばあちゃん、口紅しとるん

江美子

気持ちだけね

永依

そうなんや、似合うよ

江美子

若い人も入つて来たけんね、負けんようせな

永依

うん

江美子

美鈴ちゃん私より6つも若いけ、綺麗で

永依

うん

江美子

すぐトップになるんやないかって、莉穂さんも言いよんよ

永依

おばあちゃんはトップになれんの

江美子

お客さんは美鈴ちゃんみたいな若い子を観たがっとなるんよ

永依

でも私歌だつてまだあんまり

江美子

歌がダメならダンス頑張ればいいのよ

永依

ダメです今日はもう気持ち

江美子

美鈴ちゃんを観に来てる人だっているんだから

永依

明日の本番には間に合いませんから、

江美子

美鈴ちゃん、私はもう23よ、もうそろそろよ

永依

引退ですか？

江美子

そうよ

永依

早い、ですね

江美子

フィアンセも待たせとるし

永依

え、歌劇団の人？

江美子

ううん、普通の人、眉毛さん

永依

眉毛

江美子

美鈴ちゃん、迷つとる時間はないんよ

永依、すこし考えて。

永依

引退して結婚して、でもそれでさ、もう歌ったりとかできんくなるの、嫌やねえ

江美子

お水とって

永依

はい、ここ置くよ

【5】

瀬戸家。

リビングに佐和。江美子の部屋に江美子、永依。

玄関から音がして、朝貴が入って来る。

佐和、廊下まで迎え出るようにして、そのまま2人でリビングに戻るまで。

佐和

(朝貴に気付き) あら、そうか今日水曜か

朝貴

婆ちゃん起きとる？

佐和

姉ちゃんと話しよる

朝貴

なんで

と2人、リビングに着く

佐和、障子を小さく開けて

佐和

あんたこっちおいで

永依

何で

佐和

朝貴がインタビューするけ

朝貴、リビングから

朝貴
インタビューやないちゃ

永依、立ち上がり、自分が出られる分だけ障子を開けてリビングへ

永依
お婆ちゃんインタビューしてどうするん

朝貴、永依を無視し、江美子の部屋へ

【6】

朝貴
iPhoneが光っている。まだ空も青黒く、外の冷気で窓が結露しているくらい時間に、週に一度、鳴る俺のiPhone。

八幡の隅、生え揃った雑草と野良犬らの異臭漂う空き地、

そこが婆ちゃん家だった頃、

そこには家にあるおもちゃ箱よりも大きなそれがあった、そこには恐竜、ブロック、ぬいぐるみ、スタンプ、カードゲーム、変身ベルト、ミニカー、シールの束、鼻メガネ、コマ、小さい地球儀のオブジェなどが入っていて、俺はそれを見つめてよく、お婆ちゃんに一生ついていこう、と何度も心で唱えていた。

江美子の部屋。

江美子

(鼻歌のように) 2人の恋は、終わったのね、

朝貴

起こした？

江美子

ううん

朝貴

先週話したの覚えとる？歌劇団の

江美子

私が25まで居ったところ、歌やら踊りやらしてね、よう稼ぎましたよ

朝貴

同じ年に入った静子さんと、若くて綺麗な美鈴さんと、男役トップの莉穂

さん

江美子

莉穂さんはね、男役

朝貴

そうそう

江美子

格好よかったよ

朝貴

それで、江美子さんと1番仲良かったのが和泉さんよね

江美子

和泉ちゃんはね、優しいんよね、周りばかり気にしてね

朝貴

うん

江美子

それで和泉ちゃんにね、あんた周りばかり気にしとったらいけんよって

朝貴

うん

江美子

ちよつとは主張しなさいって、私

朝貴

うんうん

江美子

お水とって

朝貴 はい、口あけて

江美子 (水を飲み) だからね、納得いかんことはそう言わんと

朝貴 ん、うん

江美子 私もずっと守ってあげれんのかな

朝貴 ごめんなさい

江美子 今日、呼び出して聞きなさい

朝貴 でも向こうも忙しいだろうし

江美子 五郎さんから連絡待ってもどうしようもないわよ、あの眉毛

朝貴 江美子さんは、どうするの？

江美子 いいの私のことは気にしなくて

朝貴 気にするわよ、江美子さんだって、

江美子 和泉ちゃん、こっちおいで

江美子、朝貴の頭を手でぼんと撫でる、撫でながら。

江美子 ずっと仲良くいましょうね

朝貴 ええ、もちろん、おばあちゃんになっても

江美子 許してさえ、くれない、あなた、

朝貴 おばあちゃん？

障子が細く開き

永依
落花生

朝貴
え？

永依
そっちに忘れたんよ、持って来て

朝貴
おじいちゃん、名前なんやっただけ

永依
国男やなかったな

朝貴
あそう

永依
何で

朝貴、落花生を持ってリビングへ。

【8】

江美子の部屋。江美子は1人になる。

3人がリビングで話している声が、うつすら聞こえる

江美子はふふふと鼻歌を歌っている。

江美子

サヨナラと、顔も見ないで、去っていった男の心、

楽しい夢のような、あの頃を、思い出せば、

【9】

暗い江美子の部屋からシームレスに場面は変わり江美子はベッドに立つ。

柳歌劇団OGらのカラオケの宴席。家族たちはリビングから江美子の部屋に来て、実際に居たかどうかとも定かでない歌劇団の団員となる。

江美子はサン・トワ・マミーを歌う。曲の間奏。

江美子

お水とって

静子

いらんって

和泉

ダメよそろそろ顔が変色してきとる

美鈴

すいません、お水

江美子

お水いただけますか

静子

さつきから呼んでも来んのよ

江美子

そんなこと言っただって静子そろそろよ

和泉

うん顔が変色してきとる

静子

江美子も十分真っ赤やけ

江美子

ううん

和泉

静子のは真っ赤じゃない紫、真紫

江美子

私のスカートと同じ色

静子

嘘

美鈴

すいません、お水

静子

いいってこれ(酒)で、美鈴ナッツとって

江美子

ねえ莉穂さん、静子

莉穂

静子、いい加減にしる

静子

莉穂さん私はね、莉穂さんが声かけてくれたけ嬉しいんです。何十年間も連絡先だけ残っとつてさ、それで辛かったのは私だけやないはずよ、みんなきつと捨てられんかったんよ、またやるんでしょ歌劇団みんな

美鈴

お水きましたよ

莉穂

お水きたつて、静子ほら

美鈴

静子さん私もそうです、私とか入つてすぐつて感じやつたけ本当寂しかったんやけ

江美子

あと数年続いとつたら美鈴はトップやつたんやないかつて莉穂さんも言いよつたんよ

美鈴

そうやつて言つてもらえるのが嬉しいやら、悔しいやら

江美子

悔しいよね

静子

私だつてそうやけん（立ち上がる）

江美子

ちよつと静子さん

静子

私だつて悔しかった誰よりも、あんな中途半端な形で奪われるとは思わんやつたけ。でもね私はそれ以上に、このメンバーでまた歌劇団やれるのが嬉しいんです、やから飲んどるんです

莉穂

まだ話つけるまで時間もお金かかりそうやけど、その時はね江美子に歌劇団を仕切つてほしい。

江美子

わたしに？

和泉 それ私も賛成、江美子さん歌も踊りもうまいから

美鈴 うん、教えてくれるのもすごく丁寧で

静子 私も、江美子以外おらんと思う

莉穂 次の飲み会までにさ、江美子がやりたい演目考えてきてよ、それでまた皆で話そう

江美子 ありがとうございます、がんばります

春の朝。

おわり。

少女歌劇団の話

作 鵜飼秋子

【登場人物】

悠里（ゆうり）

夏妃（なつき）

彩乃（あやの）

本番20分前の楽屋で。

夏妃は鼻歌を歌っている。

悠里　　ねえ、あそこで、なんで歌うの。

みな黙っている。

悠里　　あんたよ、あんた。

夏妃　　あ、わたし？

悠里　　そうよ、あそこで歌うって台本に書いてるわけでもないのに。

夏妃　　書いてなかったってそう要請されてるのよ。

悠里

要請？

夏妃

ファンが私にそれを求めている。

悠里

まったく、とんだ大スターだわ。ねえ。

悠里は彩乃に同意を求めるが、彩乃は気が付いていない。

悠里

ねえ、ったら。

彩乃

あ、わたし、ですか？

悠里

そうよ、あんたしかいないじゃない。

彩乃

すみません。

悠里

私ならねえ、絶対にあんな突飛なこととはしないわ。だって、台本は神様じゃないの。ねえ。

悠里は夏妃に同意を求めるが、夏妃は気が付いていない。

悠里

ねえ、ったら。

夏妃

あら、私？

悠里

今、あんたの話しかしてないわよね、わたし。なんでわかんないの。

夏妃

ごめんなさいね。つけまつげが、どうもうまくいかないもんで。

悠里

つけまつげなんかどうだっていいじゃない。もともと落ちるようになっているんだから。

夏妃 よくないわ。つけまつげで、どれだけ目を大きく見せられるか決まるんだから。

悠里 ふん、そんなもん。

夏妃 (彩乃に) あなたも、つけなさいな。

悠里 つけまつげじゃなくてね、アイラインよアイライン。これをどのくらいの大きさで隈取りするかで決まってくるのよ。あんた、アイライン足りないわよ。

彩乃 私、ですか？

悠里 そうよ、あんたよ。

彩乃 (悠里の顔を見ずに下をむく) はい・・・そうですね。
悠里 なに、どうしたの。

彩乃 いえ。

悠里 気分でも悪いの。

彩乃 ええ、まあそんな感じなんです。

悠里 まったく、やんなっちゃう。どうすんの、本番15分前ですけど！

彩乃 こうしていれば・・・よくなりますから。

悠里 ちよつと、顔みせなさいよ。

彩乃 いやあ・・・。

悠里 いいから！ (彩乃の顔を無理やり上にあげる)

彩乃 (ふき出して) あははははは。

悠里 ああん？

彩乃 (すぐさま下を向き) すみませんっ！

悠里 なんなの。

彩乃 (笑いをこらえながら) そのアイコン、私、ちよっと・・・。

悠里 ちよっと何よ。

彩乃 笑ってしまつて。

悠里 はあっ？ (目を見開いて)

彩乃 (悠里の顔をみて) あはははは。

悠里 ちよっと！

彩乃 すみませんっ！

悠里 馬鹿にすんじゃないよ！

彩乃 そんなつもりじゃないんです。

悠里 舞台じゃねえ、この、隈取りが全てなんだよ！

彩乃 はいっ！

悠里 このラインがね、斜めに下がれば「悲しい」、斜めに上がれば「怒ってる」、一番後ろのお客さんだつて、このラインの上がり下がりを見れば、感情がわかる。役の、気持ち、ラインにのって伝わるの！つけまつげなんて、してもしなくても一緒！

彩乃 すみませんっ。

楽屋扉の開く音。

スタッフ (声のみ) 夏妃さん、ファンの方から差し入れが来てるんですが・・・。

夏妃 そんなの、終演後にしてちょうだい！

スタツフ (声のみ) あ、でも、待っておられるんですけど。

夏妃 だから、今はそれどころじゃないでしょうが！つけまつげがないんだから。

扉の閉まる音。

夏妃 あ、(つけまつげ) あったあつた。

悠里 あんたさあ、私の話聞いてた？

夏妃 ええ、まあ。

夏妃は、越路吹雪「愛の賛歌」の鼻歌を歌う。

悠里 おいっ！

夏妃 ・・るさいのよねえ。気分よく鼻歌くらい歌わせてくださいな。

悠里 その鼻歌、耳障り。

夏妃 だまらっしやい。私を誰だと思ってるのかしら。

悠里 なによ、急に。

彩乃 夏妃さんです！

夏妃 そう、私は夏妃。

悠里 まつげごときでオロオロするのが夏妃さまでしょうが。

夏妃 これは、私の魂。

悠里

たましい？

夏妃

つけまつげが私をスターにしてくれる。

彩乃

(頷きながら) はい、はいっ。

悠里

つけまつげで、どうやって芝居すんだい？

夏妃

つけまつげは芝居はしないわ、隈取りとは違うもの。つけまつげは、私を、スターでいさせてくれるの。あなた、つけまつげのない、わたくしの顔を見たことがあって？

彩乃

ありますっ！

夏妃

どんな顔だった？言つてごらんなさい。

彩乃

小豆が丸餅についているようでした。

夏妃

そうなの。つけまつげのない私なんて、ただの丸餅じゃない！

彩乃

そうです！

夏妃

私は、スターよ。丸餅じゃない。

彩乃

私が女優で、ううん、「夏妃」でいるためには、このつけまつげが必要なの。

夏妃

夏妃さん、ファンの方々の前でも、スターですもんね。

悠里

丸餅の私なんか絶対に見せない。それがプロってもんでしょう。

夏妃

何なの。そのプロ意識とやらは、芝居のタシにならないの。私をスターでいさせてくれる、つけまつげはね、芝居の道具じゃないの。

彩乃

最高のパートナー、いや、夏妃の魂そのものなの。

夏妃

夏妃さん、歌ってください！

夏妃

夏妃は、「愛の賛歌」を歌う。

彩乃 キャー！、素敵です！

悠里 あんたねえ、この曲、ラストでなんで歌い出すわけ。

夏妃 ラストだからよ。

悠里 台本に書かれてないでしょうがっ！

夏妃 書かれてなかったって、制作だって、私の見せ場をつくってファンサービスしろっていうんだから。

悠里 この演目と、越路吹雪のその歌じゃ、全く合っていないじゃないの。

夏妃 わたくし、この歌大好きなの。

悠里 だから！その歌は、演目と全く釣り合わないじゃないの！

夏妃 そんなことないわよ、「愛の賛歌」は愛を歌いあげてるのよ。ラストにぴったりに。

悠里 世界観が違うでしょ、「愛の賛歌」とこの演目とじゃ！どこにも接点なんてありません。

夏妃 まあ、言ってくれるわねえ。じゃ、私も気になってたんでお尋ねしますけど。

悠里 ・・なによ。

夏妃 あなた、なんで泣くのかしら。

悠里 何のこと？

夏妃 あなたの、登場シーンよ。なぜあそこで泣くのかしら。

悠里 だって、そういう感情だもの。

夏妃 感情もなにも、出だしじゃないの。

悠里 セリフの奥にある役の深い感情をこの身体で体現する、それが役者つても

んでしよう。

夏妃 おじいさんが竹をとりに行つてかぐや姫を見つける。このシーンのどこで泣きたくなるっていうのかしら。

悠里 ったく、わかってないんだから・いい？あのね、おじいさんは、あのシーンで笑つて登場なんてありえないわけ・（語り口調で）おじいさんは竹を好きで取りに行つてる訳じゃない。竹はね、在来種の木々を根絶やしにして広がり続ける荒くれものなの、放っておけば、山は竹だらけになる、

これは、竹との戦！わしは、竹の生命力に負けないスピードで竹を刈り取る、この身ひとつで山を守る、こんな大仕事がこの老いぼれにできるのだろうか・・・そういうプレッシャーと闘いながら山に入る、そういう覚悟の涙なの！

すごい、読み込みです！

悠里 ああ、こんなこと、わざわざ口で説明させないでよ。恥ずかしいったらない。どうやったら、そんな読み込みができるのよ！

夏妃 文字に表れていないバックボーンをも読み込む、それが役者の仕事でしょ。

悠里 その読み込み、迷惑よ！お客さん、キョトンとしてるじゃないのよ。

彩乃 私のあのシーンの登場の仕方、どうでしょうか。

悠里 どうでしょうかって？

彩乃 竹から出てくるときの表情なんですけど。

悠里 ああ、あれね。

彩乃 今は、晴れやかな笑顔をつくつて、竹から現れてるんです。

悠里　ふーん・・そうね、確かに。(ニヤニヤしながら) それじゃ、聞こうか、

ニコニコ笑う、それは、なぜ。

彩乃　・・ファンの皆さまへの、サービス、でしょうか。

悠里　でた！そこなんだよお。

彩乃　あつ、すみません。わたしにファンの方なんて、いるわけないんですけど。

夏妃　よろしいんじゃないくて。ファンの方を意識した登場は、この少女歌劇団で

は基礎中の基礎です。

彩乃　でも、生まれてきたばかりの人って、たぶんそんな顔してないんですよ

ね・・。

悠里　うん、いい気づきだわ。じゃあ、どんな顔なの、言ってみて！

彩乃　赤ちゃんが、誕生したときの顔ですから、こう、まず目はつむつていて、

そして、おじいさんが竹を切った瞬間に、やっぱり「おぎゃー」と泣くのが正解なんじゃないでしょうか。

悠里　そうよ！生まれてきたばかりの人間が、笑顔を振りまくのは、リアリズムに欠けるんだわ。

彩乃　今日から、わたし、目をつむつて、生まれることにしてみます。もしかして、衣装も着ないほうがいいかもしれない。

夏妃　駄目よ！いい？私の話を、聞きなさい。そもそも、人間が竹から生まれるっていう時点で、もう、これはおとぎ話でしょうか？フィクションなの！そんなシーンでなんで、リアリズムを追求しようとするのよ。今のままでよろしくてよ！

悠里　フィクションにリアリズムを吹き込んでいくのが私たち役者の使命でしょうが！闘うのよ！

彩乃　ああ、どちらをとったらいいんでしょうか。スターへの道なのか、役者への道なのか。

夏妃　スターへの道だわ。

悠里　役者への道でしょ？

夏妃　スターになる夢を捨てるのなら、歌劇団はやめて、新劇の劇団にでもお入りなさい。

悠里　役者でなくていいんだったら、歌劇団は芝居の演目なんてやめて、歌ったり踊ったり、レビューばかりやってればいいのよ。

彩乃　ああ、わからない！

スタッフ　（声のみ）開演5分前でーす。

夏妃　あら、喋ってる場合じゃないわ。（鏡に向きなおる）

悠里　ほんと、私アイコンが足りないわ。（鏡に向きなおる）

彩乃　わたし、ニコニコなのか、オギャーなのか・・・。

夏妃　あなた、つけまつげがついてなくてよ。

悠里　アイコン全然ひいてないじゃない。

彩乃　どうしたら・・・。

夏妃　さ、衣装、衣装。

悠里　あんた、十二単（じゅうにひとえ）、あと5分で着られるの？

彩乃　あ、でも、ちょっと今日はもうちょっと、はだかにしてみようかと。

夏妃 駄目よそれは、十二単いつ着るの。

悠里 そうよ、芝居が始まっちゃったら途中で着てる暇なんかないでしょう。

彩乃 でも、竹から生れたんですから、やっぱり十二単はマズイと思うんです。ちよつと、あんたねえ、急に芝居変えたりしないでよ。

悠里 そうよ、急にプラン変更なんてされたら、今までの稽古の意味がないわ。早く、衣装着なさい。

悠里 そう、あと5分で決着がつく問題じゃない！これは！
彩乃 はい！

3人とも、急いで衣装着替え始める。

悠里はおじいさんの衣装に、夏妃はおばあさんの衣装に、
彩乃はかぐや姫の衣装を身に纏う。

悠里と夏妃は、鏡に向かって口紅を引く。

彩乃もそれにならつて、自分の唇に口紅を引く。

悠里 さあ、行くよ。

夏妃 わたくしも、もういけるわ。

彩乃 あ、わたし、わたし。

悠里 先に行くわよ。

夏妃 私も、もう行くわ。

もたもた着替える彩乃を、悠里と夏妃が手伝う。

夏妃

行きましょ。

3人、ばたばたと駆け出す。

おわり

妊婦とバスの話

作 鵜飼秋子

【登場人物】

信子（しんこ・40代後半） 妊婦

頼子（よりこ・40代後半） 妊婦

希代（きよ・30代） 看護師

夕暮れ時、バスの中で。

バスには3人の乗客が乗っている。

信子、頼子、希代、それぞれに窓の外を眺めたりしている。

信子と頼子は妊婦で、お腹が大きい。

希代、信子と頼子を見ながら、ひとりまごついている。

希代 ・・あの。

信子と頼子、ちらつと希代を見るが、また窓の外を眺める。

希代 ここからのことなんです。

信子と頼子、不思議な顔で希代を見る。

希代 激しいんです。縦にも横にも、前後にも。お構いなしで。

信子と頼子、希代の言葉の意味がわかり「はいはい」という顔で窓の外に向き直る。

希代 あの、おわかりでしょうか。

信子と頼子は、無反応。

希代 降りましょう！（手をあげて）運転手さん、止めてください。降ります！

ここで！

信子 走ってください！

頼子 走り続けてください！

希代 駄目です、止めて。

信子 駄目です、走って。

頼子 運転手さん、気にせず走って。

希代 なんて、なんて。

信子 なんなんですか？

頼子 あなたなんなんですか？

信子 勝手に、止めようとしたりして。
頼子 走り続けてくれなきゃあ。

バスは、一瞬スピードを緩めたが、思い直して元のスピードで走り続けていている。

希代 わかつてるんですか？この峠の激しさを。

信子と頼子は、一瞬、考えるような顔をするが。

信子 わかつていますよ。

頼子 ええ、もちろん知っています。

希代 それなら、なんで、このバスに乗るんですか！

信子と頼子は、再び考えるような顔をするが。

ふたり、お互い顔を見合わせ「お先にどうぞ」「いえ、あなたこそお先にどうぞ」と目でやりとりをする。

やりとりに、頼子が負ける。

頼子 先を急ぐからです。

信子 のっぴきならない用事なのです。

頼子 (ふと) なんの用事？

信子 なんの用事ってそりゃ・・あなたこそなんの用事なんですか。

頼子 そりゃあ・・のっぴきならない用事ですよ。

信子 そうでしょ？ 私たち、のっぴきならないんですよ。

希代 運転手さん、止めてください！

バスが、ガクンと縦に揺れる。

頼子 駄目ですよ！

信子 走り続けてくださいーい！

バスは、ふたたび前後に細かく動き始め、途端に大きく左右に揺れ始める。

3人の身体が大きく右に傾く。

希代 お腹、おなか、押さえて。

信子と頼子は全く言うことをきかない。

3人の身体が大きく左に傾く。

希代 せめて、身体、かがめてください。

信子と頼子は希代の言うことをきくどころか、逆にお腹を張り出して座る。

希代

そんな、もしぶつかったりしたらどうするんですか？

信子と頼子は全く言うことをきかず、さらにお腹を突き出して座る。

希代

あなたたち、流産させる気ですか！？

信子と頼子は、希代の言葉を聞いてわざとらしくお腹を庇うような恰好をする。

バスはさらに激しく揺れ始め、3人の身体が転がり始める。

信子と頼子は、お腹を庇うどころか、壁にバンバンと当てに行く。

希代

こらあつ！

3人の身体が、右、左、右と転がり、信子と頼子は相変わらずお腹を壁に当て続けている。

3人の身体がさらに左へと転がろうとしたとき、希代は立ち上がり、右側の壁に2人を押し付け、さらに転がろうとするのを防ぐ。

希代 墮ろす気だな、このやろ。

頼子 滅相もない。

信子 ほんと、滅多なことを言うもんじゃありませんよ。

希代 それはね、罪ですよ！罪！あなたたち墮胎罪です！

信子と頼子、身体を思いつきりかがめて、お腹を庇う恰好。

頼子 さつき言ったでしょ。先を急いでいるんです。ねえ。

信子 そうですよ、のっぴきならない事情でこのバスに乗ってるんです。

希代 どんな事情があるうと、あなたたちのしていることは立派な殺人です！

頼子 まあっ、なんてことを。

信子 何にも知らないクセに。

希代 私を、殺そうっていうんですか！？

信子・頼子 えっ・・・は？

希代 その（2人を指さし）お腹の中にいるのは、私です！

信子・頼子 ・・あはははははは！ひー、あはははは！（笑い転げる）

希代 本当です！

頼子 お姉さん、何を言い出すかと思ったら。

信子 面白い冗談よねえ！

希代 本当なんです、ここで流産なんてされちゃったら、私は、看護婦にもなれないし・・・ここにもいられないんです！

頼子 あら？あなた、看護婦さんなの？

希代 はい。

頼子 それは、立派なことだ。

信子 病院は、どちらで？

希代 この先の病院です。これから出勤なんです、今日は夜勤で。

頼子 どうりでねえ。

希代 なんですか。

信子 どういった事情で、私たちを咎めているのかと。

頼子 バスに乗る自由をなぜ赤の他人に侵害されるのかとそれはそれは不思議で。

信子 看護婦さんだと、言われれば。

頼子 まあ、納得がいったわねえ。

希代 大人になった私は、看護婦として、こうして一生懸命働いているわけですから。それを・・あなたたちは、そういう人生をなかつたことにしているわけだ。

頼子 (大真面目に希代の手を取り) 看護婦さん！

信子 (大真面目に希代の手を取り) あなたは、立派！

希代 (2人の手を強く握り) いのちは、大切にしなければなりませんよ。

信子と頼子、鼻で笑う。

信子　そりゃあ、そうでしょう。
頼子　そんなことは百も承知ですよ、看護婦さん。
希代　でも、お腹を壁にぶついたり、一体それはどういふことなんです。
信子　だって、この揺れですもの。
頼子　身体は自然と転がってしまいますでしょう。
希代　わざとぶつけていたじゃないですか。
信子　わざと？
頼子　わざとじゃないわよねえ。
信子　転がっちゃったのよお。
希代　どうみてもわざとでした。
頼子　そんな風に見えたのかしら。
信子　そんな気は全くないんだけどねえ。
希代　••。
頼子　ねえ、看護婦さん、病院はどちらにあるの？
希代　私のはいいんです。
頼子　まあ、そんなこと言わずに。
頼子　峠を越えたところですよ。
希代　あら、じゃあ、途中で降りたりしないのね。
信子　しないですよ。
希代　この路線、このあとものすごい揺れがあるのになあ。
信子　知ってますよ。毎日乗っていますから。

頼子

ものすごい揺れのあとは？

信子

なんと、揺れは、終わりなのよ。

頼子

あらあ！そうなの？

信子

看護婦さんの病院は、大きく揺れたあとに、あるのよね。

希代

ええ、そのあと静かに細かく揺れて、1分後くらいの場合にあります。

頼子

ねえ、看護婦さん、今日はもう、このあとのものすごい揺れが来る前に降りた方がいいんじゃないかしら。

信子

そうよねえ。もう、そろそろこの辺で降りた方がいいかもしれないわ。

希代

どうしてですか。

頼子

いやね、ほら、もしかしたら、峻険な峠ですもの。道端で行き倒れている人なんかがいるかもしれないじゃない。うん、そんな気がするわ。

信子

そうですねえ。私も、何度かこの路線には乗ったことがありますけどね。森の茂みをよおく見ると、行き倒れの人をよく見かけますよ。（と言って、

窓の外を見る）

頼子

（一緒に窓の外をみながら）あ、今、人が！

信子

（窓の外をみながら）え、いやだ、あら、どこ？あら、ほんと！

頼子

（窓の外をみながら）人だわ、人！！

信子

（窓の外をみながら）人が、行き倒れている！

希代

えっ、えっ？

頼子

（窓の外を見ながら）ほら、あそこ。

信子

（窓の外をみながら）あっち。

希代

どこですか？

頼子

(窓の外を見ながら) ああ、もう後ろだわあ・

希代

本当にそんな人、いましたか？

頼子

いたわ。

信子

いるように見えたわ。

頼子

さ、降りなさいな。

希代

いえ、降りません。

信子

看護婦さん、行き倒れの人を放っておけるの？

希代

仕事に遅れるわけにいきませんから。

頼子

行き倒れの人、見殺しにするんですね。

希代

行き倒れの人に構って、病院の患者の皆さんを見殺しにするわけにもいき

信子

ませんから。いるかないかもわからないし。

頼子

まあ、言ってくれるわね。

希代

わたし、目はいいのよ。

頼子

わたしも、遠くになればなるほどよく見えるそんな目です。でも、この日

希代

暮れじゃ、茂みのなかは見えないはずですよ。

頼子

まっ！私たちが嘘ついてるっていうの？

希代

ずーっとそんな気がしています。

信子

あらあ、降りて確認してみなさいな。

希代

結構です。

信子

(手をあげて) 運転手さん、止めてください。この方降ります！

バスの揺れが静かにとまる。

頼子

遠慮なさらず、さあ、どうぞ。

信子

どうぞ、どうぞ、どうぞ。

信子と頼子は希代の手を引っ張ってバスの前のほうに引っ張って行くとする。

希代は、引っ張られないようにその場に踏ん張る。

希代

あなたたちは、このバスに乗り続ける気なんでしょうか。

信子

乗り続けますよ。

希代

危ないですよ、本当にここからはすごい揺れなんです。

頼子

さつき言ったでしょう、のっぴきならない事情があるのよ。

希代

揺れに乗じて子供を墮ろすなんて絶対に許されませんよ。

頼子

そんなじゃないわよお。

希代

一体どんな事情なんです。わざと壁にぶついたりして。

信子

特売、なのよ。

希代

・・・特売？

信子

八百屋さんの特売。

希代

そんな、このために・・・。

信子

9人も子供がいて・・・とにかく食べ物が必要なの！

希代　こんな身で、バスに乗って。

信子　八百屋はこの峠の向こうにあるんだから。仕方がないでしょう。

希代　あなたは？

頼子　家賃を。

希代　家賃？

頼子　峠の向こうの大家さんに今日中に支払わなければ、追い出されてしまうのよ。

希代　えっ！

頼子　毎月きちんと払ってあげれば良かったんだけど。もう待てないって言われてしまつて・・・9人も子供を抱えて、追い出されたら。

希代　あなたも、9人！

信子・頼子　子供が9人！

希代　お腹が10人？

信子・頼子　（悲痛な顔をしながらお腹を差して）お腹が10人！

希代　ひいっ。

信子　お米も配給になつちやつて、あんな量じゃまともに食べさせられない。

頼子　外国が攻めてくるかもしれないのに、家がないんじゃ家族を守れない。

信子　ぜいたくは敵なのに。

頼子　お国のために戦わなきゃいけないのに。

信子・頼子　「生めよ殖やせよ」の大合唱！

信子　48にもなつて。

頼子　また、子供。

信子・頼子　もうムリ！

希代　ああああっ。

信子・頼子　のっぴきならない事情なんです！

バスがエンジンをかけて高速で走り出す。

希代　（はっと気が付き）えっ？

バスがふたたび激しく揺れ始める。

右、左、右へと転がり始める、信子と頼子と希代。

先ほどとは比べ物にならないくらいの激しい揺れ。

信子と頼子は、揺れに身を任せ転がり続ける。

希代は踏ん張って止まりたいのだが、それもできずに転がってしまう。

3人、転がりながら。

希代　転がっちゃダメー！

信子　あああ。

頼子　そんなこと言ってたって。

信子　体が、勝手に。

頼子　転がってしまうんだもの。

希代

お母さん、ちゃんとお腹を守って！

信子

言ったでしょ、のっぴきならない事情なのよ。

希代

お腹の子供は、もう、いらないうってそんな事情ですか！

頼子

10人目をつくるつもりはなかったのよ。

信子

10人も育てられないわよ。

希代

でも、わたし、ここで、育ってるんです。

頼子

だから困ってるのよお。

信子

こんな世の中に生まれてくるんじゃないよお。

希代

お腹を、わたしを、ちゃんと守ってよ！

頼子

生れたら苦しいのよ、本当に苦しいの。

信子

ごはんは満足に食べられないわよ。

頼子

住む家だってまともにならないかもしれない。

信子

毎日お腹が空いて、すぐに病気にかかるわよ。

頼子

敵が攻めてきて、すぐに殺されるわよ。

希代

それでもいいんです、それでも。私、生まれたいんです。

信子

まあ、勝手なこと言っつて！

希代

勝手なことをしているのは、あなたです。

頼子

まだ、産まれてもないのに、どの口がそんなことを言うのかしら。

希代

わたしを作ったのは、お母さん、あなたでしょう！

信子

まあ、生意気ね。

頼子

生まれてきたら、とんでもないきかん坊になるわね、こりゃ。

信子 よい子だから、お母さんの言うことを聞いて。

頼子 そうよ、よい子だから、さあ、さあ、ね？

希代 うるさい、うるさい！

お母さん、あなたがなんて言おうと、私は絶対に生まれるのです！

バスの揺れが、止まる。

静まり返る車内。

3人の転がる身体も止まり、それぞれ寝転がっている。

希代 ・・・・あの・・・あの、大丈夫ですか？

信子と頼子は寝そべったまま動かない。

希代 大丈夫でしたか？

希代は、信子と頼子の身体をそれぞれ揺する。

バスは静かに振動し始める。

希代 どうしよう、あれ、ねえ、あれ？

希代は、ふたりのお腹を触ってみる。

希代 …大丈夫、みたい。

ふたり、急に目を覚ます。
ふたりは起き上がり、お腹をさすりながら。

信子 ん？

頼子 ふむ。

信子・頼子 …産まれる！

希代 …えっ？

信子 陣痛が！

希代 嘘でしょ？

頼子 これは、間もなく、産まれる！

希代 本当に？

信子 舐めるな、私らはベテランだ。

頼子 間違いなく1時間以内に産まれる。

希代 えええっ？

ふたりは、よっころしょという感じで、その場で仰向けに寝そべる。

希代 ちょっと待って。ちょっと待って。

私の病院は、もうそこです。そこで、ね、そこにしましょう？

希代

ふたりは、足を広げ、産む体制をつくる。
ちよつと！もう、着きます！

希代

ふたりは、いきみ始めようとする。
（勢いよく立ち上げり、手をあげて）運転手さん！降ります！私たち、ここで降ります！

バスは静かに、停まった。

おわり

来たれ！

作 大迫旭洋

【登場人物】

ニイムラ

オダ

老人

昭和三十二年。

演劇研究会の部室にて。

その中央には、大きなベットが一つある。

そのベッドに座って、二人が話している。

オダ だからさ、なんて言ったらいいのかなあ

ニイムラ はい

オダ もっと、こう、ずんつて

ニイムラ ずん

オダ そう、思いつきり、気前よく

ニイムラ はあ

オダ かと思えば次に、シウルシウルシウル

ニイムラ おお

オダ 軽やかに、自由に、一つのところに止まらず

ニイムラ ふんふん

オダ だけど、そのシウルシウルが、だんだんと重みを帯びてくる

それが生活、それが人生

ニイムラ なるほど

オダ 見えてきた？

ニイムラ 最初より、だいぶ

オダ 重いな、重いな、つて思うじゃない？

だけど、そこからが、人間の力、

諦めない、力

ニイムラ

オダ その力で、えいやつと、人生を投げ飛ばす

そこから見える、景色

まだ見たことのない、景色

……そんな感じに、してほしいの

ニイムラ 深いですね

オダ 深いかな？

ニイムラ 深いですよ

オダ そう？

ニイムラ やー、演劇、深い

オダ ニイムラくんもやってみる？

ニイムラ 演劇？

オダ そう

ニイムラ それは、やめときます

オダ ええ

ニイムラ 向いてないと思うんで

オダ 向いてる向いてないじゃなくて、大事なのは、気持ち

ニイムラ 気持ちもないんで

オダ そっかあ

ニイムラ はい、俺には、これがあるんで

筆を取り出すニイムラ。

オダ おお、太い

ニイムラ 一番太いの、持ってきました

オダ 頼もしい

ニイムラ ええ

オダ じゃ、早速、お願いできる？

ニイムラ わかりましたー、準備しますね

オダ うん

ニイムラ ちよつと時間かかるんで、すみません

オダ トイレ行つてもいい？

ニイムラ どうぞどうぞ

オダ ごめんねー

トイレに行くオダ。

一人で準備しているニイムラ。

そこにやってくる老人。

老人 あ

ニイムラ え？

老人 あー

ニイムラ はい

老人 誰？

ニイムラ えーつと

老人 ん？

ニイムラ ニイムラ、です

老人 シムラ？

ニイムラ や、ニイムラ

老人 ミムラ？

ニイムラ あ、はい、ミムラ

老人 ああー

ニイムラ 今日は、あの、オダさんに

老人 あ？

ニイムラ オダさん

老人 コガ？

ニイムラ オ・ダ

老人 ヨ・ガ

ニイムラ 違います違います

老人 んー

ニイムラ あ、これです、これ

ニイムラ、持っている筆を見せる。

老人 おお

ニイムラ はい

老人 なるほど、なるほど

ニイムラ なるほど

老人 あー！

ニイムラ え、なにになになに？

老人、硯をじつと見ている。
そこにオダ戻つてきて、

ニイムラ オダさん！

オダ あ

ニイムラ 誰、ですか？

オダ どしたの、やっさん？

老人 これ

オダ ん？

老人 ちようどいい、これ

オダ 靴墨？

老人 ん

オダ だめだめ、落ちちやうよー

老人 んー

オダ ちゃんとしたの買いに行こう？

老人 はい

オダ うん

老人、出て行く。

ニイムラ え？

オダ さ、始めようか

ニイムラ ちよつとちよつと、え？

オダ ん？

ニイムラ や、誰ですか

オダ やっさん

ニイムラ やっさん、誰ですか？

オダ やっさんは、街で拾った

ニイムラ はい？

オダ 街で

ニイムラ ……

オダ や、ほんとほんと

ニイムラ 闇の仕事？

オダ 違うよ、スカウト

ニイムラ スカウト

オダ やっさん、めっちゃ、靴磨きうまいの

それで稼いでもらってる

ニイムラ 稼ぐって、部費？

オダ そう、部費

ニイムラ いやいや

オダ お互いに、いい関係だから、大丈夫

ニイムラ はあ

オダ びっくりした？

ニイムラ しますよ

オダ ごめんね

ニイムラ や、こんな場所だから、てつきり、

やばい人きたと

オダ こんな場所って

ニイムラ だって、遊郭でしょ？

オダ 元、ね

ニイムラ はじめ、場所間違えたかと思いましたよ

オダ だって、もったいないじゃない

ニイムラ はあ

オダ この前の、法案で潰れちゃったんだから

ニイムラ ああ、売春の

オダ そう、で、借りれますか？って聞いたら、

ニイムラ 借りれた？

オダ うん、しかも無償で

ニイムラ 無償？

オダ うん

ニイムラ 深い

オダ 懐？

ニイムラ まあ、というか、ここが

オダ ああ

ニイムラ いろんな意味で、深いです

オダ 深いね

ニイムラ 抜け出せなさそう

オダ 抜け出せないよ

ニイムラ うわあ

オダ やればやるほど、お金無くなるの

辛くて、苦しくて、なんでこんなことやってんだらうって

ニイムラ じゃあ、なんで

オダ わからない、でも、やめられない

ニイムラ うわー

オダ ホント、親不孝の極みだよ

ニイムラ それだけ魅力あるんですね

オダ 魅力というか、魔力だね

ニイムラ 魔力

オダ うん、だから

ニイムラ はい

オダ そんな、魔力を込めて、字を書いてほしいわけですよ

ニイムラ ……わかりました！

オダ うん！

書こうと、集中するニイムラ。

それを、老人が遠くから見ている。

オダ あ、見てる

ニイムラ え？

オダ やっさん

ニイムラ どこですか

オダ 俺の背中側

ニイムラ (横目で見て) あー

老人 ……

ニイムラ 見えますね

オダ 大丈夫？書ける？歪んだりしない？

ニイムラ まあ、大丈夫と思いますけど

オダ やっさんね、

ニイムラ はい

オダ 恋人できたんだよ

ニイムラ 何ですか、その情報

オダ うん

ニイムラ 今いらないますよ

オダ 名前、カズコさんっていうの

ニイムラ はあ

オダ カズコさん、すごく、料理上手くて

ニイムラ はい

オダ そこがいいらしい

ニイムラ ……はい

オダ じゃあ、どうぞ

ニイムラ ちよつとちよつと

一度、筆を置くニイムラ。

オダ え、なに？

ニイムラ や、頭の中が、いっぱいなんで

老人 あーふ

オダ あ

ニイムラ 何ですか何ですか何ですか

オダ 大丈夫

ニイムラ え？

オダ やっさん、聴こえないから

ニイムラ 聴こえないって

オダ 耳遠いから

ニイムラ はあ

オダ やっさん、邪魔？

ニイムラ まあ、はい

オダ やっさーん

老人 ん？

オダ ごめん、ちよっと、あっち行つて

老人 ん？

オダ あっち！あっち！

老人 え？

オダ ノー！見るの、ノー！

老人 うん

老人、去る。

オダ どう？愉快？

ニイムラ はい

オダ 集中できる？

ニイムラ 頑張ります

オダ よし

ニイムラ それでは

オダ 改めて、お願いします

筆をとるニイムラ。

勢いよく、木の板に、文字を書いてゆく。

ニイムラ ずん！

オダ ずん！

ニイムラ しゆるしゆるしゆる！

オダ ぐうーっ！

ニイムラ はあっ！

オダ おおー

書、完成。

そこには、「演劇研究会・城野寮」の文字。

ニイムラ どうですか？

オダ いいね

ニイムラ いいですか？

オダ うん、いい

ニイムラ 良かった

オダ いや、いい、いいわー

ニイムラ これ、どこに飾るんですか？

オダ 表に

ニイムラ 表？

オダ うん

ニイムラ 大丈夫ですか？

オダ 大丈夫だよ

ニイムラ はあ

オダ だって、いいから

ニイムラ いいなら、いいんですけど

オダ いいねー

その文字を見ている二人。溶暗。

リントクの恋

作 大迫旭洋

【登場人物】

ボク

サエ

チカコ

昭和二十五年ごろ。

夜、小倉駅前。

活気に満ちた、雑踏の音が聞こえる。

ボク

ご通行中の皆さま、

連日の仕事に飲み会にお疲れの皆さま、

リントクでございます。

私の後ろに乗ったが最後、

愛しの我が家へひとつ飛び。

どこよりも早く、安く、お送りいたします。

リントク、リントクはいかがでしょうか、

そこを通りかかる、女が二人。

チカコ あの、お兄さん

ボク はい

チカコ 二人、大丈夫ですかあ？

ボク もちろん、大丈夫ですよ

チカコ よかったあ、サエ、こっちこっち

サエ、近づく。

ボク、サエを見て、固まる。

サエ ごめんなさい、助かります

ボク ……

チカコ お願い、しますね

ボク は、ははは、はい

サエ はい

チカコ あら、お兄さん

ボク はい？

チカコ や、お兄さん、っていうより、ボクって感じか

ボク ボク？

チカコ そう、ボク、まだこの街を、

ボク
なーんにもわかってない、ボク
はあ

サエ
ちよつと、チカちゃん

チカコ
ボク、女二人、片野までお願い

サエ
すみません、お願い、します

ボク
かしこまりました

チカコ
うん

タイトルコール。

ボク
リンタクの恋

動き出す、リンタク。

チカコ
筋肉、ついた？

ボク
はい？

チカコ
この仕事始めて

ボク
あ、まあ、そりゃあ、少しは

チカコ
すごいねえ

ボク
そうですか？

チカコ
すごいよ、ねえ？

サエ 良いと思います

ボク ありがとうございます

チカコ あ、耳

ボク はい？

チカコ ボクの耳、赤くなってる

サエ あ

ボク え？

チカコ どうしたの、赤くしちやっ

ボク なってないです

チカコ え？

ボク 赤くは、なってないです

チカコ かわいい

ボク いやいや

チカコ ボク、こっち見て？

ボク え？

チカコ お姉さんたちのほう、見てごらん

ボク 見れないですよ

チカコ 見れないってことは

ボク 見れないですよ、運転中なんで

サエ そうだよ

チカコ 一瞬くらい、大丈夫大丈夫

ボク 僕の、仕事は、

チカコ お

ボク お客さまを、迅速に、安全に、

お送りすることなので

チカコ ……クルー!!!

ボク え？

サエ ちよつとどしたの、チカちゃん

チカコ や、ぐつと来る、ぐつと来ない？ね

サエ 何がよ

チカコ ボク、この仕事、始めてどのくらい？

ボク 二ヶ月です

チカコ だよねえ、ウンウン

ボク 何ですか

チカコ まだ染まってない、この街に染まってない、それがいい

ボク そんなことないです、

僕、生まれも育ちも、小倉だから

チカコ そう？

ボク はい、いろんなお客さんとも、お話ししてるし

チカコ どんな人？

ボク それは、

サエ うん

ボク や、言っではいけないことになってるので

サエ そっかあ

チカコ 怖い人とか？

ボク あ、

チカコ 夜のお店の、お姉ちゃんとか？

ボク うーん

チカコ 私たちもそうだもん、ねえ？

ボク え？

サエ またあ、もう

チカコ ボク、わかる？夜のお店

行ったことない？

ボク ありません

チカコ じゃあ、想像して、

暗い、お店の中に、ボクと、女の人、

お酒の匂い、なんでもできるような気がしてくる

サエ ちよつと、もう

チカコ 何でもしていいの、ボクが、したいこと

チカコ、ボクの耳に息を吹きかける。

ボク

うわあ！

サエ やめなよ、チカちゃん！

チカコ (笑っている)

ボク 怒りますよ、もう

サエ そうだよ、危ないよ

チカコ (まだ、笑っている)

ボク 何笑ってるんですか

チカコ あー、おっかし、おっかし

サエ あの、すみません

ボク はい？

サエ 全部、冗談なんで

ボク 冗談？

サエ その、夜のお店の人、とか

ボク あ

チカコ そう、冗談です、信じた？

ボク ……

チカコ あ、黙った、怒ってる？

サエ ごめんなさい

ボク あ、いやいや、大丈夫、です

チカコ ごめんね、ボクがかわいいから、

ボク からかいたくなっちゃう

ボク どうも

チカコ あら、どうもって
ボク いや
チカコ 悪い、悪い男になる素質、あるう……

チカコ、黙る。間。

サエ すみません
ボク はい？
サエ 寝ちゃいました
ボク あ、寝てます？
サエ はい
ボク どおりで
サエ はい

間。

ボク お友達ですか？
サエ そうです、高校の時から
ボク あ、いいですね
サエ はい

間。

サエ ……暗いなあ

ボク あ、すみません！

サエ え？

ボク なんか、うまく、喋れなくて

サエ あ、いやいや、違います！

ボク え？

サエ や、あの、外が

ボク ……

サエ 外の景色が、暗いなあ、って

ボク ああ！

サエ はい

ボク あ、そうですね、暗いですね！

サエ 暗いです

ボク すごく暗い！はい！

サエ そうですね、ふふ

ボク すみません、勘違いがひどくて

サエ いやいや、私が、誤解させてしまっ

ボク て

サエ ふふふふ

ボク おかしいですか？
サエ おかしかったですね、私たち
ボク はい

間。

サエ 暗い、から、助かります
ボク え？
サエ 歩いて帰るの、怖いから
ボク ですよね
サエ ええ、私の家の近くも、
ボク 小倉くらい明るいといんですけど
サエ 離れると、すぐ暗くなりますもんね
ボク そうなんです
サエ なんて、集まっちゃうんだろう？
サエ はい？
ボク や、人が一箇所に集まるから、
サエ そこだけ明るくなっちゃうわけじゃないですか？
ボク みんなで広く場所使えば良いのに
サエ 好き、なんですよ
ボク え？

サエ

きつとみんな、

集まるのが好きなんですよ

ボク

ああ、うーん

サエ

はい

ボク

なんでですかね？

サエ

寂しいからです

ボク

……

サエ

そんな気がするなあ、なんて

ボク

寂しいんですか？

サエ

うん？

ボク

や、お姉さんも

サエ

うーん

ボク

はい

サエ

寂しくなかったら、お酒は飲まないかもしれないなあ

ボク

そうですか

サエ

お酒は、好き？

ボク

あ、まだ、飲めないんで

サエ

うそ、まだ十代？

ボク

はい

サエ

そっかあ、そっかあ

間。

サエ あ、この公園を、左に

ボク 左、ですね

サエ はい、あ、

このあたりで、大丈夫です

ボク 分かりました

サエ チカちゃん、チカちゃん

チカコ んん

サエ 着いたよ

チカコ 分かってる

サエ ほら

チカコ 分かってる分かってる

サエ 何が？

チカコ 大丈夫、大丈夫だから

サエ 大丈夫じゃないよ

ボク 手伝い、ましようか？

サエ いいの？

ボク はい

サエ ありがとう

チカコ、を挟み、ボクとサエ。

ボク よいしょつと

サエ ごめんね、こんなことまで

ボク いえいえ

チカコ ツツあー！

ボク 大丈夫ですかね

サエ まあ、いつものことなんで

ボク なら、まあ

サエ はい

間。

ボク あの、お姉さん

サエ 私？

ボク はい

サエ サエです

ボク サエ、さん

サエ はい

ボク サエさんは、何されてるんですか？

サエ 仕事？

ボク

はい

サエ

喫茶店

ボク

へえ

サエ

マスターが音楽好きで、色んなレコードかけるの

ボク

大人だ

サエ

大人かなあ

ボク

大人ですよ

サエ

すぐなれるよ

ボク

なりたいなあ

サエ

でも、大人だよね

ボク

僕？

サエ

うん

ボク

や、全然、まだ十九ですし

サエ

あ、でもね、年じゃないよ

ボク

はい？

サエ

や、お店で、色んなお客さんと話すんだけど、

ボク

なんとというか、全然年じゃない

サエ

うん、私と同年でも、すごいしっかりした人いるし、

ボク

逆におじさんだけど、子どもみたいな人、いる

ボク

ああー

サエ 分かる？
ボク なんとなく、ですけど
サエ ん、だから、年じゃない
ボク はあ
サエ うん
ボク 何、なんですかね
サエ うん？
ボク 年じゃない、としたら
サエ ……経験、かな
ボク 経験
サエ うん、誰と会ったか、どんな時間を過ごしたか
ボク それが、大事なんだと思う
サエ なるほど
ボク っ、偉そうに、ごめん
サエ いやいや
ボク 私も全然、これからだからさ
サエ 確かに
ボク 確かに？
サエ あ、いや
ボク ありがとう

間。

ボク ……あの、

サエ はい？

ボク 今度、お店に行っても、良いですか？

サエ 良いですよ

ボク やった

サエ お待ちします

ボク はい

チカコ ん

ボク あ

サエ 起きた？

チカコ ん、今起きた

サエ もー着くよ

チカコ はい

サエ うん

チカコ あら、ボクちゃん、ありがとう

ボク いえいえ

チカコ ぎゅー

ボク え、ちよつとちよつと

チカコ 冗談

サエ
チカコ

もー
んふふ

サエとチカコ、いなくなる。

ボク、一人で戻ってきて、自転車にまたがる。

一呼吸。

太ももに力を入れ、だんだんと、

その回転数を上げてゆく。

車輪の音だけが残る。

おわり

おつかれさん

作 寺田剛史

【登場人物】

清 サッポロビール九州工場勤務

麦田 サッポロビール九州日田工場勤務

麦田は工場内の写真を撮っている

清 お待たせしてごめんね。

麦田 あ、いえいえ。初めまして。日田工場の麦田と言います。

清 ヨシヒロさんですか？

清 おーおーそうそう。

麦田 お忙しいところありがとうございます。よろしくお願いします。

清 もう全然忙しくないけ。よろしく。若いねいくつね。

麦田 26です。

清 26ね。まだ入ったばかりね。

麦田 入社5年目です。ヨシヒロさんはここに努めて何年ですか？

清 何年っち、19で入ったけ何年かね？今59やけ、分らん、計算してん。

麦田 18才で入ってずっとでしょ？

清 わからんちゃ。

麦田 分からんって、18からだから、40年？41年ですね？

清 そげなるかね。

麦田 そげなりますよ。

清 じゃあそげしとって。

麦田 大先輩ですよ。

清 そうね、じゃあそげしとって。

お疲れさまですの声

麦田 ヨシヒロさんは日田には行かないんですか？

清 おん、俺も行かないけんっち思いよったけどここ見とつてくれっち事でね、
残るんですね。

清 残るっちゅっても、もう定年間近やし。

麦田 やっぱり寂しいですか？

清 そんな寂しいとかはないね、

麦田 そうですか。さつき神主さんがいましたね。

清 おお、長い事やとつたけお疲れさまっち事で回っとなやろ。

麦田 お祓い？

清 しらん、もう終わりですなっっちゅうお疲れさんやろ。

工場におつかれさん？

清 そうやないか。

麦田 長い歴史がありますもんね。

清 まあな。

麦田 結局建物の老朽化と、原料の水で日田に九州工場を移すんでしようけど。

それならなんでそもそも門司に？って思うんですよ海真横だし、100%天然水なんて湧いてこないでしょうし。

清 ここじゃ無いといけん何かがあつたんやろな。

麦田 何かつて？

清 外国から船がよけきよつたからなここは。世界中から門司にビールを求めて人がやってくる。そんな事がやりたかつたんやないか？わからんけど。

麦田 ま、確かに、輸出するにはもってこいの場所かもしれないね。じゃ逆に

日田に行くって、守りに入ってる感じしますね。国内だけでいんだ見たいな。

清 守りきれんかつたんかな？

麦田 守り方ですかね。

清 守れんもんや価値のないもんは無くなるよ。

麦田 ん？

女性の声（声）お疲れさま。

男は声の聞こえた方を気にして、

麦田 お疲れさまです。

清 どうしたんね。

麦田 いやお疲れさまですって。

清 ほお。誰やろ。ほな行こうか。

麦田 あ、はい。ヨシヒロさんはやっぱりビールが好きですか？

清 そうやねえ、あんた？はビール好きね。

麦田 僕はある。

清 そうね。仕事ん時もその辺栓ひねって飲みよったよ昔は、

麦田 え、それって、

清 本当はいけんけどね、タンク1ミリ減ったくらい誰も分らんちゅってバケ

ツでくんで飲みよったけ。あんまり言われんけどね。

麦田 マジですか。

清 まだ動きよったら出来たてあんたにも飲ましちやりたかったけどな。うま

いぞー。

麦田 でもそれって大問題なるでしょ？

清 ならんならん。無くなった事すらだーれも気づかん。

麦田 沢山入ってますからね。分んないか。

清 こっち行ってみようか。

麦田 はい。

(声のみ) お疲れさまー。

麦田 まだ人が働いてるんですか？

清 いやもう誰もおらんよ

麦田 そうですよね。

清 あははは、あれ見てん。

麦田 ん？

清 あれよあれ。

麦田 どれですか？

清 ほらそこ。

男が裸で現れる。

男 いやー疲れた、あー疲れた、暑い。お、一番やな。よいしょ！はあー気持

ちいいー。

男 おー1番風呂か。

男 ちよつとぬるい、お湯出して。

男 はいはい、

男 ここのお湯がウチに繋がつとつたら風呂代タダやな。

男 好きな時にお湯でるけな。

男 ビール作るんと風呂のお湯同じち贅沢贅沢。

男 お前もそこで発酵させちやるか？

男 あほか、あつそう言えば今日栓抜けてから、ドンドコドンドコビール垂れ

流しやったぞつち言いわれよったぞ。

男2 あら、ばれとったんか、あちゃー、怒られるぞそれ、お前の事。

男2 ああ俺か。

男2 なんか俺かつち。

男2 次、俺は入るけな。

男2 はいはいー。

男達居なくなる。

麦田 ドラム缶、ですか？何に使うんですか？

清 仕事終わりにドラム缶風呂に入って汗を流してる男達。

麦田 あ風呂か。

清 俺も昔は入りよったなあ。

麦田 え、でもお風呂無いんですか？

清 あるある。

麦田 でしょ？3交代だし、設備としてありますよね。

清 あるけどそこまで行くのがめんどくさい。

麦田 めんどくさいって。

清 汗流すだけやきね、

麦田 そうでしようけど。

清 お湯なんてなんぼでもできるき。

麦田 そうでしようけども。

清 ビールもその辺の栓ひねればなんぼでもできるき。

麦田 飲み放題みたいに言わないで下さいよ。

清 好き放題飲みよったわけやないきね。

麦田 そりゃそうでしようけど。

清 もうひねつても出らんな。

麦田 空っぽですね。

清 こっち行こ。

麦田 あ、はい。

(声のみ) お疲れさん!

清 ほらあそこ見て。

麦田 はい。

清 あそこは、箱作りよつたとよ。

麦田 箱? ケース?

清 今は、缶は段ボール、瓶はプラスチックケースやろ?

麦田 そうですね。

清 木箱でね、瓶が割れんごと周りに藁つめてから、木箱だけ作る仕事もあつたね昔は。

麦田 へー。

麦田 木箱にですか。

清 そう、瓶詰めやな。

麦田 へー。

清 あんた、ジャイアンツとか知らんやろ。

麦田 知ってますよ、

清 知つとるとね、そうね。

麦田 今はもう製造してませんけど

清 あれも作りよったけなことは。

麦田 今、ジャイアンツの瓶だけでインターネットで販売されてて、大体

2000円くらいで買えますよ。レトロなビール瓶つてことで。

清 売れるとね、瓶が。

麦田 そうなんですよ。

清 ただの瓶にそんな価値があるとね。

麦田 無くなつた物にも価値がありましたね。

清 無くしといてまた欲しがるちゃ勝手やなあ。しかし金になるつち分つとつ

たら取つとけば良かったな。ジャイアンツの瓶どつかないのかな？

麦田 欲しくない時にあつて欲しい時に無い。

清 ジャイアンツを売つてお金が欲しい。昔もそう思えてたら取つとつたかも

麦田 な。

麦田 ジャイアンツはだつてただのビールの入れ物ですもん。

清 価値が変わったんかな。

麦田 価値の変わらないものがないですね。

清 例えば？

麦田 例えば……。

清 ジャイアンツどっか落っこちてないかな。

男3、4 出てくる。

男3 あるねそんなもん。

男4 ジャイアンツとか今あっても冷蔵庫入らんけ。

男3 もう缶ばっかりやな。

男5、 出てくる

男5 昔っからこの美味さだけは変わらんなあ。瓶でも缶でもビールは上手い！

男3 お前それどっからもって来たとか。

男5 あ？そこから。

男3 また盗み飲みかお前は。

男5 違うつちゃ、確認！

男4 なんの確認よ。

男5 なんのっち、おいしく出来とるかどうかの確認たい。

男3 そんなもん、俺も確認せないけんやろ。

男4 ただ飲みたいだけやろ。いいけさっさと箱作らんか。全然間に合っていないやけ。

男5 わーかつとるって！

男4 じゃあちよつと確認してからやろう。

男5 お前も飲みたいんやないか。

男達 (それぞれに) そうしよう。

男達居なくなる

清 ま無いやろな。よし、違うと、こっち行こ。

麦田 え、あ、はい。え？

清 俺のおやじもサツポロビールなんよ。

麦田 え、親子でビール作ってたんですな。

清 いや、おやじは修理のほうやけ。

麦田 ああ、設備の。

清 あれが貯酒タンク。カラやな何も残つとらん。

麦田 カラなんですな。

清 おーい。元気かー。

貯酒の男 これなくなったら終わりやー！

麦田 元気ないでしょうねカラだと。

清 喜んどるんかー？

貯酒の男 これなくなったらもう終わりやー！

清 怒つとるのかな。

麦田 怒ってないですよ。そやってカラになっても話かけてもらって、タンクも

嬉しいと思いますよ。

清 おつかれさん。

貯酒の男 お疲れさーん！

清 怒つとるんかー。

貯酒の男 怒つとらん！

清 怒つとらんか。

麦田 喜んでますよきつと。

貯酒の男 俺はな！俺はなー！、

男、貯酒タンクの裏に飛び降り消える。

清 この工場が閉鎖される事に憤りを感じて、やりきれない気持ちをぶつける相手も居なく、しかたなく貯酒タンクに気持ちをぶつけることしか出来ない不器用な、男。

麦田 急に今のお気持ち爆発しましたね。

清 じゃあ戻ろうか。つとその前にちよつと便所。先戻つとつてもいいよ。

麦田 あ、はい。

清、トイレへ。

お疲れさまの声

麦田
お疲れさまで、あれ？

お疲れさまの声が次第に増え。

麦田
あれ？あれ？おつかれさまです。

男が現れ

男6
はいおつかれさーん。君は日田工場から来たのかい？

麦田
あ、おつかれさまです。はいそうです。

男6
どうだいこは。

麦田
来れて良かったです。

男6
よかつたら見て回らんか？

麦田
いや今見て回って来たところですよ。

男6
そうなんか、何を見たのか？

麦田
ドラム缶風呂とか、貯酒タンクとか。

男6
は？

麦田 男6 麦田
え？
そう言う事ではなくて。
はい？

女が現れる

女1 麦田 女1
お疲れさまです。
お疲れさまです。
工場見学？
はい。
見て回る？
いや、今見て回って来たので。
どこを？
だからドラム缶風呂とか、
麦田 女1 麦田
そう言う事ではなくて。
え？

お疲れさまでしたと声だけが聞こえる、
次第に声の数が増え、機械が稼働する音も聞こえてくる。

男6
早よ来な。

麦田
女1

はい。
待つとるよ。

2人いなくなる。
清が戻ってくる。

清
麦田

お待たせ。ほな戻ろうか。
はい。

2人歩き出す。

麦田
清
麦田
清
麦田
清
麦田
清
麦田
清

ヨシヒロさん
はい
ちよつといいですか。
ん？
ちよつと。
なんね。
ここ立って下さい。
うん。
1枚撮っていいですか？
写真？

麦田 記念に。
清 いいけど。

麦田 写真を撮る。

麦田 これ、現像したら送りますね。

清 いやいい。写真はいい。

麦田 え？

清 記念は無くても大丈夫。

麦田 でも折角だし。

清 それよりちよつと飲んでくか。

麦田 え？

清 1杯だけ。ここで飲むビールは格別やぞ。

麦田 いいんですか？まだあるんですか？ビール。

清 あるよ。

麦田 どこに？

清 ここで飲んだビールの事、なくならんごと持つとつて。

麦田 え？はい。

おわり

シリ会いたい

作 寺田剛史

【登場人物】

男

康夫

電車から男2人が降りてくる。

男

いたいたいたいた。

康夫

騒ぐなよ。

男

いやー今日もいいなー。

康夫

いやーしんだよ。

男

イヤらしい？そんな事言ってるやつほど、頭ん中そればかりだよ。

康夫

お前だろ。

男

お前だろ。

康夫

ああ。

男

待て、俺のいいなーはそう言ういいなーじゃないぞ。

康夫

じゃどういういいなーだよ。何がいいんだよ。

男 何がつて、だつていいだろ。お前もいいなつて思つてんだろ？
康夫 思うよ、でもお前のいいなーとはきつと違う。
男 じゃお前のいいなーはなんだよ。
康夫 言葉に出来るくらいいいなーならいちいちもやもやしてねーよ。
男 ハッキリした「いいなー」無いんじゃないかよ。
康夫 あるけどお前とは違うの！
男 じゃあ具体的にどこ見てんだよ。
康夫 だから具体的な感じで見てないの分かるだろ。
男 でも見てるだろ。
康夫 見てるよ。お前こそどこ見てんだよ。
男 どこつて・・・何だろ、全体的な雰囲気？
康夫 誤摩化してんじゃないよ。
男 誤摩化す？
康夫 雰囲気って何だよ
男 雰囲気は雰囲気だろ、全体的な雰囲気見て何が悪いんだよ。
康夫 尻だろ。
男 お前それは失礼。
康夫 尻だろ？
男 尻じゃねーよ。
康夫 どうせ尻だろ。
男 どうせつてなんだよ。誰の尻でもいいわけじゃないよ。

康夫

尻じゃねーかよ。

男

尻を見るとするのなら誰の尻でも言い訳じゃないよって事！尻だけ見てるとは言ってるねーだろ。

康夫

尻だけを見てるのに全体的な雰囲気はね？みたいな言い方すんなって言うてるの。

男

まて、尻しか見てないみたいない方やめろ。

康夫

尻以外にも見てんのか？腰か？脚か？尻だけ見てる方がまだ可愛いわ！ちよつと待てよ、俺は何なんだよ、そんなに尻尻言うなよ。

康夫

尻大好きなんだろ、ええ？そうなんだろ？好きなんだろ？尻が。尻が好き過ぎて、困るんだろ？困ってるんだろ？

男

困ってはねーよ。というか、好きなのは尻じゃない。

康夫

尻じゃない？嘘だろ？そんだけ尻見といて今更尻じゃないって。じゃどこだよ、どこがいいなーなんだよ。

男

知りたいか？

康夫

知りたい。

男

知りたいんだな？

康夫

教えるよ。

男

シリたいんだなって。

康夫

シリたいって言うてるだろ。

康夫

お前まさか。

何だよ。

男 お前まさか、気づいてないわけじゃないよな？

康夫 気づいてるよ。

男 良かった。

二人 ・・・。

男 なぜあんなに綺麗な服を着ているのか。

康夫 外見の話だな。

男 俺はキッチリしている仕事だからだと思っう。

康夫 俺もそう思っう。

男 じゃあ例えばどんな。

康夫 そうだな、銀行員。

男 銀行員にしてはあのヒールはなさそうだ。

康夫 高いな。10センチはある。

男 色もきつい。

康夫 赤は無いな。

男 いや、カウンターから見えない足下だと高いヒールも有りなのかもしれない。

康夫 身長もそんなに高くないところを見ると、カウンター越しのお客にも印象

男 銀行員。

康夫 いいな。

男 いいな。

男
俺は、そうでもない。そうでもないって言うのはさほど落ち込まないってことだ。どうだ？

康夫
どうだ？だめだ、かなりの落ち込みを感じる。

男
なので、自分で言っておきながらもこの妄想はやめたい。

男
やめよう、自由だ。

康夫
そうだ、今俺は自由に妄想中だ。

男
そうするしかないからな。

康夫
そうするしか無い。さて、それは自由なのか？

男
自由じゃないのかもしれないな。そうか、何かに縛られて妄想するしか無

いのと、何にも縛られることなく妄想するのでは訳が違う。

康夫
妄想するしか無い虚しさがある。

男
その虚しさを取り払うにはどうすれば？

康夫
自由じゃないかもしれない妄想から少し現実に近づけてみるとどうだ。

男
どうする？

康夫
彼女に話しかけてみる。

男
おお。

康夫
どうだ？

男
思い切ったな。

康夫
やってみるか。

男
勇気が居るな。

康夫
そりゃ現実に体当たりだからな。現実には実に厳しい。

男 よし、やろう。

康夫 やろう。

男 まずここから小走りで軽く人ごみをかき分け、彼女の隣にたどり着く。

康夫 いいな、それからどうする？

男 隣にたどり着いて、横顔を見ながら、

康夫 見ながら？

男 見ながら、

康夫 見ながら、

男 ・・・忍者ですか？

康夫 それだともう2度と話してもらえなくなるな。

男 なるな。

康夫 これはどうだ？小走りで駆け寄る。

男 声の届くところまで行くしか無いからな。

康夫 横に立って一言。

男 何を言うか。

康夫 ・・・いい尻してますね。

男 ・・・よし次。

康夫 何を言うか。

男 横に立って一言。

康夫 綺麗な脚ですね。

男 違う気がする。

康夫 じゃあこれはどうだ。横に立って一言。ご結婚されてますか？
男 それでいいのか？

康夫 横に立って一言。いつも後ろからジロジロ見えます。

男 横に立って一言。いつも2人でああなたの事でいろいろ妄想してます。

康夫 横に立って、

だめだ。どれも心証が悪い。

男 そうだな、しかし話しかけたい。

康夫 話かけて気に入られない。

男 どうすればいいんだ。

康夫 どうすればいいんだ。

男 俺に聞くなよ。

康夫 俺に聞くなよ。

男 自分で考えろ。

康夫 自分で考えろ。

男 いいよなお前は、思いついた事すぐに言えて。

康夫 お前に少しでも勇気出るんじゃないかと思って一生懸命考えてんだろ。

男 それはありがたいけど、結局やるのは俺だろ？

康夫 やるやらない話す話さないで言うならお前も俺も一緒だろ。

男 確かに。

康夫 どうすんだよ。

男 どうするって。

男 決めるよ。

康夫 そうだけど。

男 俺はどうする事もできねーよ。

康夫 ちよっともう黙ってる。

男 お前そりゃ無いよ、俺だって、あつ！

康夫 黙ってるよバカ。

男 ……。

康夫 さてと。あの角を曲がるまで。

それまでに話しかけないと昨日と同じだな。そしたらまた明日に持ち越そう。

男 ……。

康夫 そうだな。そうやってもう何日経った？。今日話しかけないともうきつと知り合う事は無い気がする。気がする？知り合う事なんて無いな。ずっとないな。行くしか無い。話をしてみたい。どんな仕事で、趣味は何で、好きな食べ物、嫌いな食べ物。何でもいいから彼女が知りたい。ここだけの話、まだ話した事も無いけど。ずーっと一緒に居られたらきつと幸せだろうなと思ったり。して。

男 行こう。

康夫 よし行こう。

男 頑張れ俺。

康夫は小走りに軽く人ごみをかき分け彼女の横に立ち。

康夫

おおお、おはようございます。よよよよかったら、ああの角までおおおお話して頂けませぬか？

おわり

演劇研究会城野寮

作 渡辺明男

【登場人物】

小田（某北九州大学の演劇研究会の代表）

藤岡（演劇研究会の部員）

おさえ（演劇研究会の寮に住み込みで働く老女）

山久（演劇研究会の寮に住み込みで働く老人）

楠木（大学の教員）

部員A（演劇研究会の部員）

昭和32年。

城野の街にある元・妓楼であったところの北九州大学演劇研究会城野寮。

演劇研究会の代表である小田が難しい顔をしてお札を数え。帳簿とにらみ合いをしている。

藤岡が隣でその様子を見守っている。

小田 う〜ん…。

藤岡

どうだ。

小田

やっぱり足りんな。

藤岡

そうか…。

小田

藤岡くん、君ちよるまかしてはおらんだろうね？

藤岡

小田くん、そんなまさか。よしてくれよ。

小田

藤岡くん、君しゃべり方が変だぜ。もつと普通に話したらどうだい。

藤岡

小田くん、君こそ変だ。気付いているかい？

小田

…稽古の癖がついてるな。

藤岡

そうだな。

そこへ、住み込みの男山久が外から帰ってくる。

山久

どうもただいまです。お、いいにおいがしますな。

藤岡

山久のおいちゃん、あんたお金をちよるまかしてないかね？

山久

何を言うんや人聞きの悪い。売り上げの3割、きっちり払っとるわい。(お金を小田達に渡す)

小田

いやあ参った。これじゃあ芝居が打てんぞ。(頭を抱える)

山久

ああそうだ。表に大学からお客さんが来てますよ。

小田

大学！？(藤岡に)おい藤岡！

藤岡

ややや俺は関係ないちゃ！

小田と藤岡、顔を見合わせる。

部屋の奥から、おさえが顔を出す。目が悪いので杖を突いている。

おさえ

豚汁をこしらえましたよ。

山久

お、いいな。

おさえ

あんた帰ってきてたの？

山久

おうちようどいまよ。うっひひ。

小田

おい、おいちゃん。大学の人って誰や？

山久

ん？そんなん知るもんかい。外の看板見てじーつとじーつとだけ…

外から、楠木が入ってくる。

楠木

表にずいぶん立派な看板が出ておりますな、でかでかと。『北九州大学演

劇研究会城野寮』。うむ。素晴らしい。

藤岡

あつはははは。こりやあどうも。(ひきつった笑顔)

小田

おい藤岡。おいちゃん達連れて奥に引っ込め。

藤岡

ん、え？

楠木

いいや。ここから全員1歩も動くな！

その場にいる全員に緊張が走る。

楠木　　この代表は誰や。

藤岡　　あはは…おたくは警察の方か何か…

楠木　　貴様らの大学の教員じゃバカたれ。

小田　　代表は僕です。

楠木　　(天井から壁から見渡し)　ここは、なんだ。

小田　　わが演劇研究会の寮です。

楠木　　それはおかしい。私の記憶だとここは遊郭だったはずだが。

小田　　(手を挙げて)　先生、先日発令された売春防止法をご存知ですか？

楠木　　馬鹿にするな！

まさかとは思うがつぶれた遊郭を借り受けたんじゃあるまいな。

小田　　そのまさか…

楠木が1歩前へ踏み出そうとする。

小田　　(楠木を手で制して)　勘違いしないでいただきたい。われわれは決して春を売っているわけではありません。

藤岡　　その通り。(自らの尻を叩きながら)　わが尻には何人たりとも指1本触れさせてはおりません。

楠木　　この馬鹿どもが…！

楠木、小田達につかみ掛かろうとするが、山久が止めに入る。

山久 まあまあまあ！落ち着いて話し合いましょう。ね。はは。

楠木 あなたがここの持ち主ですか？

山久 え？いやあつはは。そんなまさか。わたしはここへ拾ってこられた、ただのしがない男でござんす。

楠木 拾ってこられた！？

藤岡 ちよっとおいちゃん誤解を招く言い方はやめてくれたまえ。ははは。（楠木に）彼には靴磨きをして働いてもらっているだけです。

楠木 靴磨き？

山久 そうです。大学で。

楠木 大学で！??

小田、頭を抱える。

山久 小田くんはマージンを3割しか取らないので、助かっております。

藤岡 おいおっちゃん！しー、しー！

（山久に）あんた、余計なこと言わんほうがええよ…。

（おさえを見て）…このご婦人はどちらさまかな。

山久 これはわたしと同じようにここに住み込んでいる女ですが、いや、劇研の連中の飯を作ったり洗濯をしたりしているだけで。まあしかし、いつの間にかわたしとそういう関係になってしまったので、いまでは世間というところのいわゆる女房みたいなもんですな、へへへ。（にっこり）

おさえ

(山久を制する) あんた!

楠木 ……うん(咳払い)。代表の君、なんと言ったかな…

小田 小田です。

楠木 小田くん、少し話がしたい。わかるね。

小田 (ため息をついて) 藤岡。

藤岡 あ、ああ…。

藤岡、山久とおさえを連れて奥の部屋へ…行ったふりをして2人の様子
子をうかがっている

楠木 遊郭を寮にするとは、ずいぶん大胆なことをするな。演劇研究会の伝統か?

小田 いえ、伝統も何も僕が演劇研究会を作ったので。

楠木 では総責任者の君に聞かすが、なぜ見知らぬ老夫婦が演劇研究会の寮に住み
込んでいるんだ。

小田 それはまあ藤岡が…いえ、成り行きでして。

楠木 靴磨きをさせて、金をピンハネしているというのは、本当か。

小田 ピンハネという用語がありますが。まああれです職業の斡旋と言いま
すか…。

楠木 君はチンピラか。

小田 (手を挙げる) 先生殿。芝居は金がかかるのをご存知ですか?

楠木 それは健全な活動をしている学生が言うことだ! しかもこんないかわし

い場所を寮にするなど言語道断である。即刻引き払うように。以上！

楠木、立ち去ろうとする。

小田 ここを立ち退くわけにはいきません。

楠木 (立ち止まり) なんだと？

小田 ここは遊郭だったかもしれませんが、いまはわが演劇研究会の立派な寮です。部屋がある。風呂も便所もある。大広間で稽古もできる。こんないいところは他にありません。ここで誰の目も気にせず朝から晩まで稽古に打ち込めるからこそ立派な活動ができるんです。

楠木 芝居をやっているだけのことはあるな。よく舌が回る。

小田 先生殿は、わが劇研の人気を知りませんか？

楠木 知るわけなからうが。

小田 それはもう熱狂的な人気なんです。うむ、そうだな。(部屋の奥に向かって) あの話をするか、刑務所行った時の！

藤岡 (部屋の奥から顔を出して) うむ。やむを得まい。

楠木 刑務所？やはり貴様らは本物の悪党のようだな。

小田 それが逆なんですなあ。わが劇研が役人に頼まれて刑務所に芝居をしに行った時の話です。いやあ、囚人にまで我々の名前が轟いておるのでしよう。劇研の女優を見て騒ぐのは当たり前前だろうが！

楠木 囚人が女を見て騒ぐのは当たり前前だろうが！

小田
それが尋常な騒ぎ方ではないのです。こう女優が檻の前を歩いておられますな。(尻を振りながら歩く)

藤岡が部屋の奥から飛び出して来る。

藤岡
(檻をガシヤンガシヤンさせながら)うほうほうほー！うおううおううおう！
中にはひきつけを起こすものまで出る始末。(女声で)あらハンカチが…(拾おうとして尻を藤岡の方へ向ける)。

藤岡
うほうほうほひぎゃぴー！(床に転がる白目をむく)…よだれがドロリ…。
とまあ、こんな具合であります…。芝居が終わった後も囚人たちが…

藤岡
(直立不動で)北九大劇研、バンザーイ！
嘘をつけ！

小田
大拍手をもらったのは本当です。学生の劇団が刑務所を慰問。これは新聞にも載りました。いかがですか？これが芝居の力です。

楠木
ようくわかった。しかしな、小田くん。

小田
ではこの芝居はどうですか。うちの松石くんが全身白塗りでロダンの『考える人』になって座ってただけの芝居。これは受けましたな。はは。

楠木
わしは、芝居になんぞなんの興味もない！

楠木、建物を出ていく。

小田 ちっ。

藤岡 おいおいおい、どうするんだよ。出て行かないけんくなったら。
小田 冗談じゃねえや。無視だ無視。

2人の様子をそつとうかがう、山久とおさえ。

小田 (ふたたび帳簿を見て) それより、このままじゃチラシも作れんぞ。

藤岡 ここを追い出されたらどこで稽古をするんだよ。
小田 大丈夫だよ。心配するなら金の心配をしろ。

劇研の部員Aが、学校から寮へ戻ってくる。

部員A おつかれさんです。あ、いいにおいがする。

小田 ああ、もうそんな時間か。稽古の準備だな。

部屋の奥からおさえが出てくる。

おさえ 今日は豚…

藤岡 豚汁！今日は豚汁だよ！さつさと食って稽古だぞ！
部員A いいねえ。あー、おなか減った。

おさえ …。

部員A、ばたばたと部屋の奥へ。

小田 よし、俺たちも食おう。

藤岡 ああ…。

小田と藤岡、豚汁を食べに行こうとするが、おさえが声をかける。

おさえ あのう、聞き耳を立ててたわけじゃないんやけどね…

山久が部屋の奥から顔を出す。

山久 ここは取り潰しになるんか？

小田 いらん心配せんでいいんよ。おいちゃんたちを乞食にはせん。

山久 俺らはいざとなったらどうとでもなるけど、お前らは芝居ができんくなつたら…。

藤岡 あーあ、看板を出したのが大失敗やったなあ。なんであんな看板出したんや小田。

小田 …立派な寮が見つかってうれしかったんや…。

おさえ そりゃあうれしいよねえ、こんな立派な…（部屋を見渡す）

小田 まあとにかく大学には話をつける。まかせんしゃい。

山久 大丈夫かい？

小田 劇研は人気と実績があるんや。絶対に押し通してみせるわい。
藤岡 うむ、そうやな。

部屋の奥から、部員たちが顔を出す。皿を持って豚汁をすすっている。

部員 A みんな食べんの？

藤岡 いまから食うわ。

部員 A 外のおっちゃんは帰ったん？

小田 外のおっちゃん？

部員 A 看板外しよった人。あの人誰？

藤岡 は？

小田 ど、どうということや…

楠木が『北九州大学演劇研究会城野寮』と書かれた看板を抱えて再び入ってくる。

楠木 目一杯釘を打ちよって、この馬鹿どもが。(痛めたのか指を振っている)

藤岡 まだいらしたんですか先生！しつこいなあ！

楠木 ようし、待っててやるから全員荷物をまとめろ。

小田が毅然と前へ出る。

小田 わたしたちの活動を潰すつもりですか。

楠木 風紀を乱す活動は一切認められん！

藤岡 今から稽古ですよ！

小田 (藤岡を手で制す) 少し時間をもらえませんか。

楠木 まかりならん。今すぐここへ部員たちを集めろ。

小田 なんと言われようと、俺らはここをどきませんよ。

楠木 なんだと？

小田と楠木、にらみ合う。

山久とおさえ、目配せをし、一芝居打つ。

おさえ

(胸を抑え) あ、う、くく苦しい……。

山久

ああ、おまえ！もしかして発作かい！？

おさえ

このいやな雰囲気……神経に……うっ……だれか、誰か医者を呼んで……

山久

(必死の形相で) おい小田くん！

小田

え？ああ……しかしどうすれば……。うちに医学生は……そうだ、おい藤岡！

藤岡

えー？……ああ、医学なら少し覚えがある。どれどれ……(おさえの脈を取る)

山久

うちのやつは大丈夫でしょうか！？

藤岡

(目が泳ぐ) えー……これは、その……。 (思わず小田の方を見てしまう)

小田

(藤岡に耳打ちする)

藤岡 …これは…寿命です。

山久 寿命!?!こんなに苦しむ寿命があるんですか!?!

藤岡 寿命とはそういうものです…。

山久 ぐう…!

おさえ いいんよ、あんた…。それより、劇研の子たちを頼みましたよ…。あの子

たちはお芝居にすべてをかけているんですから…。どうか支えてあげて…。

この寮のこともお願いします…これからもずっと…。

山久 …。

小田 (山久を肘で小突く)

山久 し、死ぬなあー! (号泣)

楠木 くさい芝居をするな。

山久 芝居!?!この発作が芝居!?!?なんちゅうやつや!誰かあいつに豚汁をぶ

つけてやれ!

おさえ (楠木に) 鬼!鬼!

藤岡、笑ってしまう。

藤岡 ぶははは!おっちゃん達、勘弁してくれよ!

小田 ぶっぶぶぶ!

皆が笑い始め、楠木もつられて笑ってしまう。

藤岡 おっと先生。機嫌が戻りました？

楠木 ふん。おい小田、この看板はどっから持ってきた板や。

小田 …大学の壁に使ってた板をはがしました。

藤岡 マジかよ小田！

楠木 ばれんとでも思うたか。まったくお前はふざけとる。少し厳しくいこうと思うたが、下手な芝居で笑うてしもたわ。

小田 …申し訳ありません。(頭を下げる)

楠木 お前が熱心なのはわかるが、こんなことでは大学の面目にかかわる。

小田 …はい。

楠木 ここでわしが見逃しても、いずれは大学で噂になる。そうなつてからでは遅いだろう。大学を追い出されたいか。

小田 いいえ。

楠木 明日大学に來い。こつてり絞つてやる。

小田 わかりました。

楠木、看板を置いて出ていく。

山久 あー、よかった。

おさえ ホントホント。

藤岡 助かったよ。

山久 いやあ、俺らも割とうまいやろ芝居。

おさえ
藤岡 ばれたんじゃないかと思っぴひやひやしたわ
いや、ばれとったよ…。

山久とおさえ、笑いながら部屋の奥へ。
部員Aもほっとして、部屋の奥へ。

藤岡 どうなるかち思ったわ。

小田 ああ…。

藤岡 こりゃあ俺たちの代で終わるかもな、劇研は。

小田 馬鹿言え。

藤岡 それは冗談だが、しかし後輩が困るぜこれじゃあ。

小田 だからいまこうやって頑張ってるんだろう。俺たちの芝居が評判になれば、

藤岡 劇研の名前が九州に知れ渡るぞ。

藤岡 大きく出たなまた。金もないのに。

小田 いやあ、案外その通りになるぜ。

藤岡 わかったわかった。とりあえず飯にしようや。

藤岡、奥の部屋へと歩き出す。

小田、腕を組み大きな夢を想像しながら語る。

小田 俺たちが有名になればだな、いずれ北九州にでっかい芝居小屋を建てて…。

藤岡、立ち止まる。

藤岡 芝居小屋？

小田 そこで俺たちの芝居を打つわけだ。

藤岡 俺たちの芝居…。

小田 そうだ。俺たちの芝居だ。

藤岡 ははは。そいつはいいな。

小田 そうだろう？

小田と藤岡、語らいながら皆が待つ部屋の奥へと歩いて行く。

おわり

無法者とピアニスト

作 渡辺明男

【登場人物】

モンク（孤高のピアニスト。お金には全く困ってないのでマイペース）

高松（やくざ）

組長（やくざの組長）

昭和三十年代。

小倉の街。紫川沿いの高架下。

高松がモンクの背中に拳銃を突き付けている。

高松 次の汽車が来たらお前は終わりや…。何か言い残すことはあるか。

モンク （高松に背を向けたまま） 言い残すことは無いけど、ちょっとお宅の組長と話したい。事務所まで案内してくれんか。

高松 チンピラでもこの状況やったら小便ちびって命乞いするが、すごい度胸やなお前は。

モンク あの、聞こえてた？事務所まで…

高松 案内するわけなからうがきさん！川に突き落とすぞ！

モンク

あ、そう。

高松

ほんとにええ度胸しとるなお前は。ここで終わりなんやぞ。

モンク

え？

高松

聞いてんのかこの野郎！おまえは二度と…

電車が来る。高松が何か叫ぶが電車の音で一切聞こえない。

そこへ組長が走ってやって来て、高松を蹴り倒し、殴る蹴る。

電車が通り過ぎる。

組長

なんしよるんかきさん！

高松

え、組長！？

組長

社長つち言わんかこら！（高松を蹴りまくる）

高松

すいません社長！急にいなくなっただんで自分一人で片を付けようと思つて…。

組長

便所に行つとつただけや。わしの腹の具合をなめるな。（モンクに）申し

モンク

訳ありません。これはこいつが勝手にやったことでした…。

組長

どうぞ！

モンク

（振り返る）あんたが親分さん？

組長

社長ち言わんかこら！（高松を殴る蹴る）

高松

（殴打されながら）俺じゃないっす！俺じゃないっす！

モンク

事務所まで行こうかと思ってね。ぼかあ（僕は）なんでも話合えば分かり合えるんじゃないかと思ってるんでね…。

組長

（高松に）話し合ってわかるわけねえやろが！やくざなめとるんかこらあ！（高松を殴る蹴る）

高松

（殴打されながら）俺じゃないっす！俺じゃないっす！

組長

（高松に）わしは少し挨拶して来いち言うただけやろうが。物騒なもん出
すな。

高松

すみません。

モンク

ぼかあ（僕は）ギャラの交渉は自分です。あんたたちに話をつけてもら
う必要はないんよ。

組長

…うむ。

高松

お前らのギャラを上げるために俺らが店と交渉してやろうっち言いよるん
や！

モンク

どうせ上がった分はあんたらに払うことになるんや。

組長

（モンクに）あなたのバンドのメンバーの皆さんは、どうでしょうか。ギャ
ラが上がれば全員ハッピー。腰をぐわんぐわん振って大喜びでしょう。

モンク

ぼかあ（僕は）お金には困ってないんよ。

組長

ふざけんじゃあねえぞこらあ！（高松を殴る蹴る）

高松

俺じゃないっす！俺じゃないっす！

組長、高松を紫川に放り込む。

高松　ぎゃあああ！（川にドボン）

組長　金に困ってないのは大変結構ですな。

モンク　この街にはこの街のやり方というものがありますもんで。しかし僕は自由にやりたいからね。

組長　これは警告…（腹をさすって）あ、ちよつと失礼。

組長、川の方へ降りていく。

モンク　そっちは川やけど…。

組長　ちよつと腹の具合がアレでして…。ちよつと待つとつて。

組長が川岸でしゃがみ込む。

モンク　いやそんな、川で尻を出したら、桃太郎の桃が流れてくるところみたいや

けん。どんぶらこどんぶら…あー、そんな気張つたら…。

電車が来る。組長の脱糞の音がかき消される。

高松があわてて川から上がってくる。

電車が去る。

高松　ウンコが流れてきた…。クソつたれが！

モンク

この季節の紫川はどうね。

高松

やかましい！あんまり調子に乗りよったら、二度とピアノが弾けんくなるぞこら。

モンク

弾けんくなるも何も、ばかあ（僕は）もうピアノ辞めて博多に帰ろうと思つとるけんね…。

高松

はぶあ？なん言いよるとかキサン。

モンク

普段は博多で家具を売りよる。僕の本業は家具屋やけん。お前はピアノが本業やろうが。し、知つとるんぞこら。

高松

クラブのオーナーに頼まれて小倉に通いよるんよ。

モンク

お前そんな、辞めるとか…もつたないやろ…。セロニアス・モンクをあげんピシツと弾けるのはお前以外知らんぞ。おい、お前以外知らんぞ！

高松

いやあ、最近は掛け持ちもつらくてね。

モンク

お前のあだ名の田村モンクはそこから来とるんやろうが。知つとるんぞこつちは！

高松

全然人の話聞かんねあんだ。

モンク

気付いてないなら教えてやるけどの、お前のセロニアス・モンクはすごいんぞ！

高松

本人やけ、そら知つとるけどね。

モンク

それを辞めるとかならん言いよるんやお前はあ！馬鹿なこと言えやあ！信じられんなあこいつはあ！

モンク

全然聞かんね僕の話。

高松 手が震えたな。勝手に指がトーントーンって、リズムをな。俺もまあドラ

ム叩いたりしよったんよ。前にちよつとな。ふふ。ねえ聞いとる？

モンク こっちのセリフよそれは。

高松 俺はヤクザもんの中でも叩けるほうや。どうしてももって言うならお前のバ

ンドで叩いてやってもいいぞ。

モンク いやいい。

高松 返事が速かろうがキサーン！

組長 (河原から) おい高松！紙がないぞ！

高松 へい！（モンクに）おい、ちり紙持ってないか。

モンク じゃあ僕は行くから。

組長 (河原から) おい高松〜！

高松 すいません！こいつが帰ろうとしてるもんで！

組長 ああ！？

組長が、半ケツで川の方から戻ってくる。

組長 まだ話は終わっておりませんぞ。

高松 組：社長。尻を隠してください。

モンク いきなりヤクザに連れ去られたけんね。お店の人たちが心配しとるやろう。

組長 そんな人聞きの悪い。

モンク 違うんかね？

組長 いやそうやけど…

モンク 話はもう済んだやないの。じゃあ失礼。

組長 人の話を聞けこら！（高松を殴る蹴る）

高松 俺じゃないっす！俺じゃないっす！

モンク （僕は）あんたらみたいのとは契約はしない。

組長 おい、高松。

組長、高松に向かってあごをしゃくる。

高松 （組長の目を見てこわばる）え、あ…へ、へい。

高松、拳銃を取り出す。

高松 田村あ！（モンクに拳銃を向ける）

電車が走り抜ける。

モンクと高松、にらみ合う。

組長 田村モンクさん…悪いことは言わん。わしらの言うことを聞け。

高松 （モンクに）死にてえのかテメエ！死んだらピアノ弾けんぞこらあ！

組長 （高松に）だまっとれえ！

高松

あいす！

組長

この前あんたの店にピストルが撃ち込まれたやろう。あらこいつらの仕事
たい。

モンク

そうやろうね。

組長

あんたのその頑固さはどこから来とるんかね。

モンク

どこからもここからも生まれつきのもんやろう。

高松

頑固さも一流やなキサン！

組長

あんたはまさかこちらが本気やないと思つとるんじゃあるまいな。

モンク

親分さん、他の人は知らん。しかしぼかあ（僕は）イヤなことはテコでも

組長

せん。やるならやればいい。ぼかあ（僕は）一步も引く気は無い。

高松、動揺する。

高松

え…あ。

組長

クソしてくる。

組長、再び川岸へと降りていく。

取り残される、モンクと高松。

モンク

これで振り出しに戻ってしもたね。

高松　う、後ろを向けこらあ！

モンク　さつきもそうやったけど、あんたには撃つ度胸は無かろうもん。

モンク、後ろを向く。

高松　次の汽車が来たらお前は終わりや。

モンク　いまからうちの店に行かんかね。ちょっとドラム叩いてみたらどうやろ。気分も変わっちゃうかも。

高松　なんでお前は言うこと聞かんのや。二度とピアノ弾けんくなるんやぞ。お前のピアノが世の中から消えるいうことは…俺は泣くいうことや。

モンク　それはこっちのセリフや。あんたもこんなことしたくはなかうに。
高松　なんやその命乞いは〜。

高松、拳銃をモンクに向ける。

モンク　あんたジャズは好きかね？

高松　米軍キャンプでよう聴きよった。
モンク　なるほどね。

電車はまだ来ない。

モンク あんた、刑務所に行くことになるな。

高松 俺は出て来たばかりや。

モンク 人を殺したんかね。

高松 タタキや。

モンク 強盗か。おっかない。ぽん。

高松 お前、なんで逃げんのや。

モンク 逃げて欲しいんかね。

組長が、戻ってくる。

組長 おい、なんでやらん。

高松 まだ、汽車が…。

組長 いいからやれ。

高松 今撃つと、騒ぎになります。

組長、高松から拳銃を取り上げる。

電車が来る。

組長、拳銃を発砲するが、高松が組長の腕を抑えたため、モンクから弾は逸れる。

電車が去る。

組長 なんしよるんやキサソ。

高松 すいません。

組長 なんしよるんやこらあ！（高松を殴る蹴る）

高松、組長に土下座をする。

組長、怒りの表情で高松を見下ろしている。

組長 あんたはもう帰っていい。

高松 すみませんでしたあ！

組長 お前が入ってる間にお前の家族の面倒見たんは誰や。

高松 すみませんでしたあ！

組長 誰やこら言うてみい！

モンク ……ワン。ツ。あ、ワンツースリー。

モンク リズムを取りながらジャズを口ずさむ。

組長 （モンクに）なんしよるんや、貴様。

高松、こっそり指でリズムを取る。

組長 なんリズム取りよるんやこら！

高松 取ってないです！

組長 指がトントンしよつたらうがキサン！

高松 社長！

組長 なんや！

高松 最後にドラムを叩かせてもらえんでしょうか！

組長 え？！

高松 今回のことは腹を切つて詫びます。

組長 だから最後に一度だけ叩かせてもらえんでしょうか！

高松 なんやそれは。ワシがはいわかりましたと言うとでも思つたんか。

組長 思いました！

組長 思つたんか。アホかお前は。

モンクもなぜか笑う。

組長 なんてあんたが笑うんや。

モンク いや、つい。

組長 腹が痛いのに笑わせやがって。(腹をさする) 高松。

高松 へい！

組長 田村モンクさんをお店まで送って差し上げろ。

高松 へい！

組長、腹をさすりながら去る。

モンク

死んだかと思ったが助かった。思った通りにはならない展開。まるでモンクの音楽そのものやないの。

高松

やかましい！お前、俺が命懸けで助けたんやから、ピアノ絶対辞めるんやないぞ！お！こら！わかつたんか！お！

モンク

そしたら、家具屋を閉めて裸一貫で小倉に来ないけんな…。僕もさんざん悩んだんやけど…

高松

そうせい。行くぞ！

モンク

ホント話聞かんねあんだ。

高松

やかましい。早よタイコを叩かせろ！

高松とモンク、組長とは反対の方向へ去っていく。
そして、小倉の街にジャズが流れる。
おわり

【平成30年度公演情報】

北九州芸術劇場＋市民共同創作リーディング

「Re:北九州の記憶」

日程：平成30年10月7日（日）・8日（月・祝） 14時 会場：北九州芸術劇場小劇場

【構成・演出】 内藤裕敬（南河内万歳一座）

【作】 穴迫信一（ブルーエゴナク）、鵜飼秋子（さかな公団）、大迫旭洋（不思議少年）、寺田剛史（block）、渡辺明男（バカボン座）

【インタビュー協力】 大久保允さん、小田晏雄さん、河口紀代子さん、財津貴美子さん、財津康男さん、田村勝哉さん、富原千江子さん、吉廣清さん

【出演】 内山ナオミ（飛ぶ劇場）、宇都宮誠弥（飛ぶ劇場）、河口玲子（劇団C4）、木村健二（飛ぶ劇場）、鈴木隆太、高野由紀子（演劇関係いすと校舎）、高山実花、高木政則、平嶋恵璃香（ブルーエゴナク）、宮村耳々、森川松洋（バカボン座）、脇内圭介（飛ぶ劇場）

「スタッフ」

照明・・磯部友紀子*

音響・・横田奈王子*

衣裳・・内山ナオミ（工房MOMO）

演出部・・小笠原敬子

照明操作・・芳田寛希*

音響操作・・雑賀慎吾*

舞台監督・・谷川哲朗*

演出助手・・穴迫信一（ブルーエゴナク）

宣伝美術・・トミタユキコ（eCAPHOC）

広報・・金子美紀*、一田真澄*

票券・・青山恭子*

制作・・吉松寛子*、松山勇斗*

プロデューサー・・津村卓*

（* 北九州芸術劇場）

主催・・（公財）北九州市芸術文化振興財団 共催・・北九州市

助成・・文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業） 一 独立行政法人日本芸術文化振興会

企画・製作・・北九州芸術劇場